



イチャラブ関係にならないと
出られない部屋
お人好し過ぎて
抵抗なく堕とされた
チヨロイン幼馴染



「友馬〜っ!」

地元の学校に通うごく普通の男子生徒、山野友馬(やまのゆうま)。
幼馴染である平森さつきが声をかける。



さつき「おはようっ！」

友馬「ああ」

いつも通りの朝。

家も隣同士で小さい頃からずっと一緒だった。

当たり前のように同じ学校へ進学し、当然のように一緒に登校する。



年頃なので周りにそんな関係をからかわれることもあるが、友馬は悪い気はしなかった。

さつきは明るく誰にでも優しく接するため、学年や男女関係なく好かれている。

さつきがみんなから大事に思われていることは嬉しいが、一番に想っているのは俺だと、自分がこれからもさつきの隣で見守ってやるんだと友馬は想っていた。



□放課後

さつき「友馬ー先帰ってていいよ、私ちよ
つと吉田先生に頼まれたことあるから」
クラス委員を務めるさつきはたまにそ
うして放課後に居残り作業をする。

とはいっても10分もあれば済ませら
れるような雑務だが。

担任の吉田文雄（よしだふみお）先生に
授業で使った教材を旧校舎まで一緒に運
んでほしいと頼まれていた。

自分も手伝おうかと友馬は言ったが委
員の仕事だからと断られた。



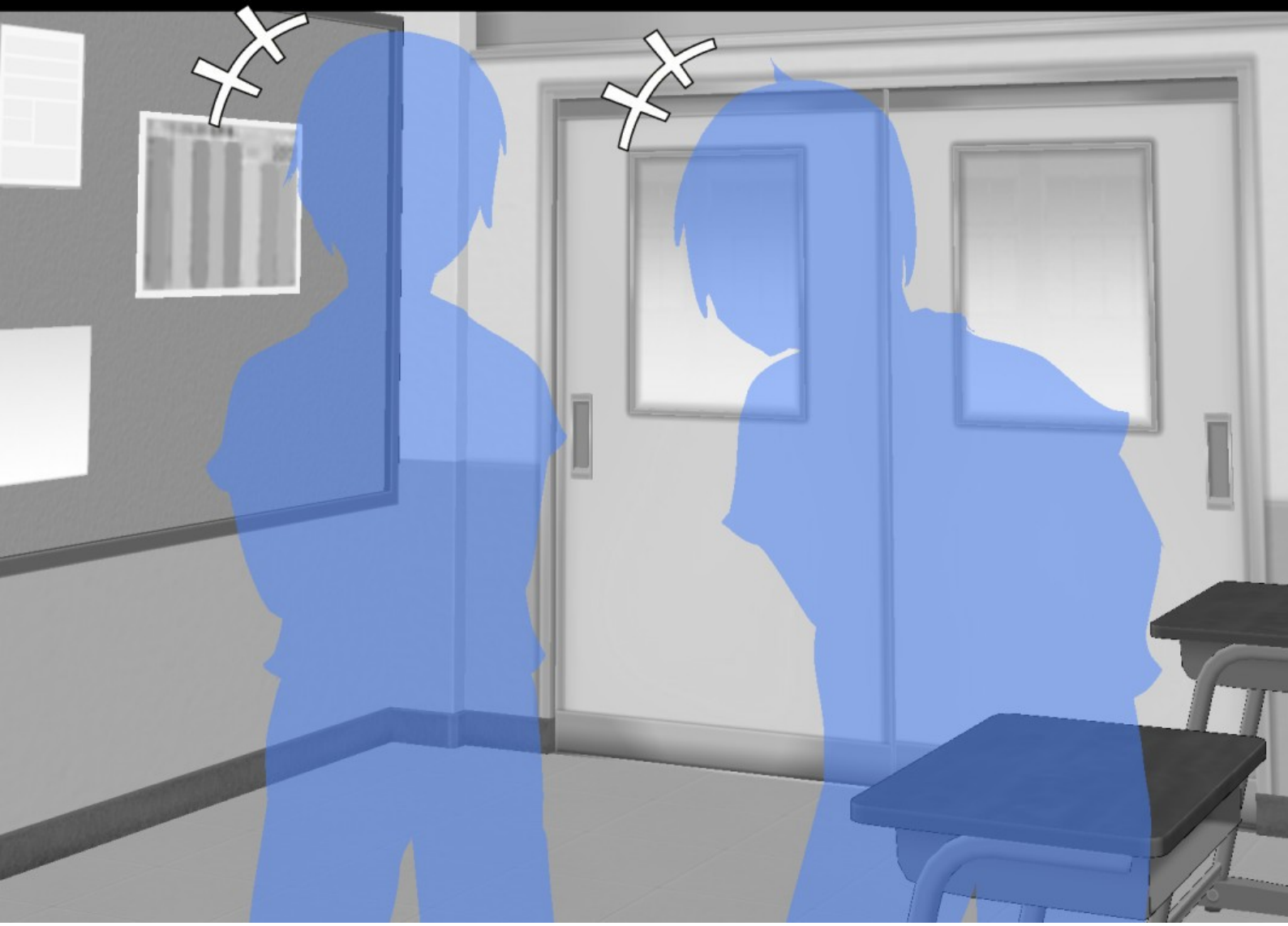
しつこく言い過ぎてクラス男子に「さつきちゃん好きすぎだろw」「だったらさつきと告ればいいだろw」と茶々を入れられるのも面倒だったので、大人しく教室で待っていることにした。

…先に帰っていいと言われたのに、待っているというのもアレかもしれないが。

しかし、10分、20分経ってもさつきが帰ってくる気配はなかった。

さつき本人もすぐ戻ってくるつもりだっただろうし、スマホは恐らく鞆に入っている。

友馬「…」

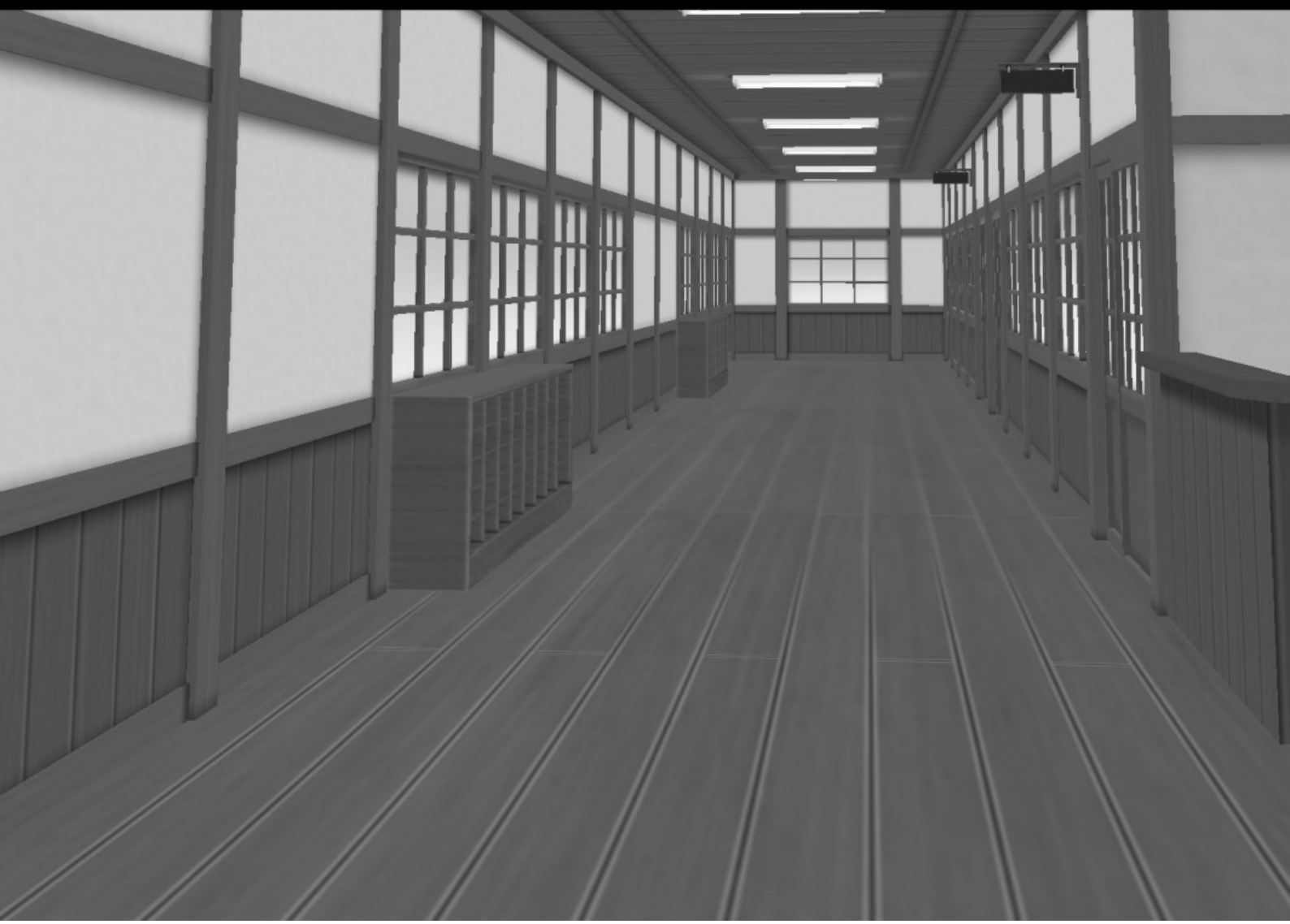


□旧校舎

放課後にもなれば、生徒も教師もほとんど来ることはない空間。

教材を旧校舎の空き教室に置いて来るとは言っていたがどこなのだろうか。

友馬はとりあえず一階の廊下を漠然と眺めていた。



友馬「……！」

思っていたよりすぐに見つけられた。

正確には、さつき本人かはまだ分からないがスカートを履いている女子の脚が教室を跨ぐ形で遠めにチラツと見えた。

どう見ても横たわっている。

友馬は急いで近寄る。

やっぱりさつきだった。

が、安心できる状況ではない。

こんな場所で倒れていたのだ。教室内を見ると担任の吉田先生もうつつ伏せて倒れている。



さつき「すーっ…すーっ……」

……ただ寝ているだけだった。

友馬「ど、どういうことだ…?」

二人が同じタイミングで急に寝付くなんてことがあるのだろうか。

友馬（…俺が来るのを見越して、ドツキリ的なことしてるのか…?）

と、友馬は思ったが、さつきが先生をまきこんでまでそんなおふざけをするとは思えない。



友馬「……っ……??？」

頭で色々考えていたら意識がボウッとしてきた。

体に力が入らず、尻もちをつく形でペタンと床に座り込む。

友馬「……っ」

瞼が重く感じ出した。

自然と視界が狭まった。



|

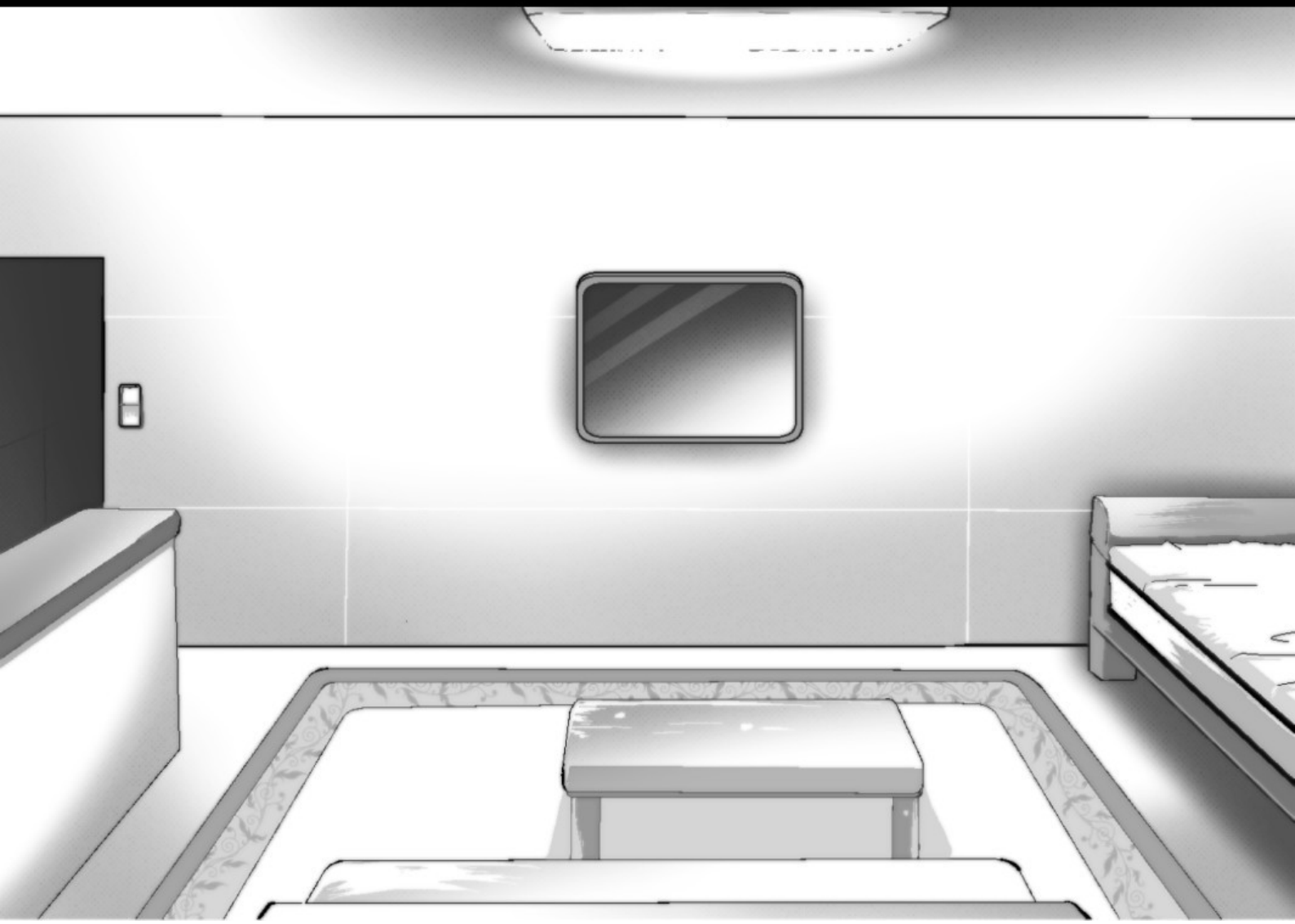
o

|

|

目を覚ますと友馬は壁も天井も真っ白な
ワンルールの床に仰向けに寝転がってい
た。

白いベッド。白いソファ。白いテーブル。
意味あり気に壁に掛けられているテレビ
モニター。



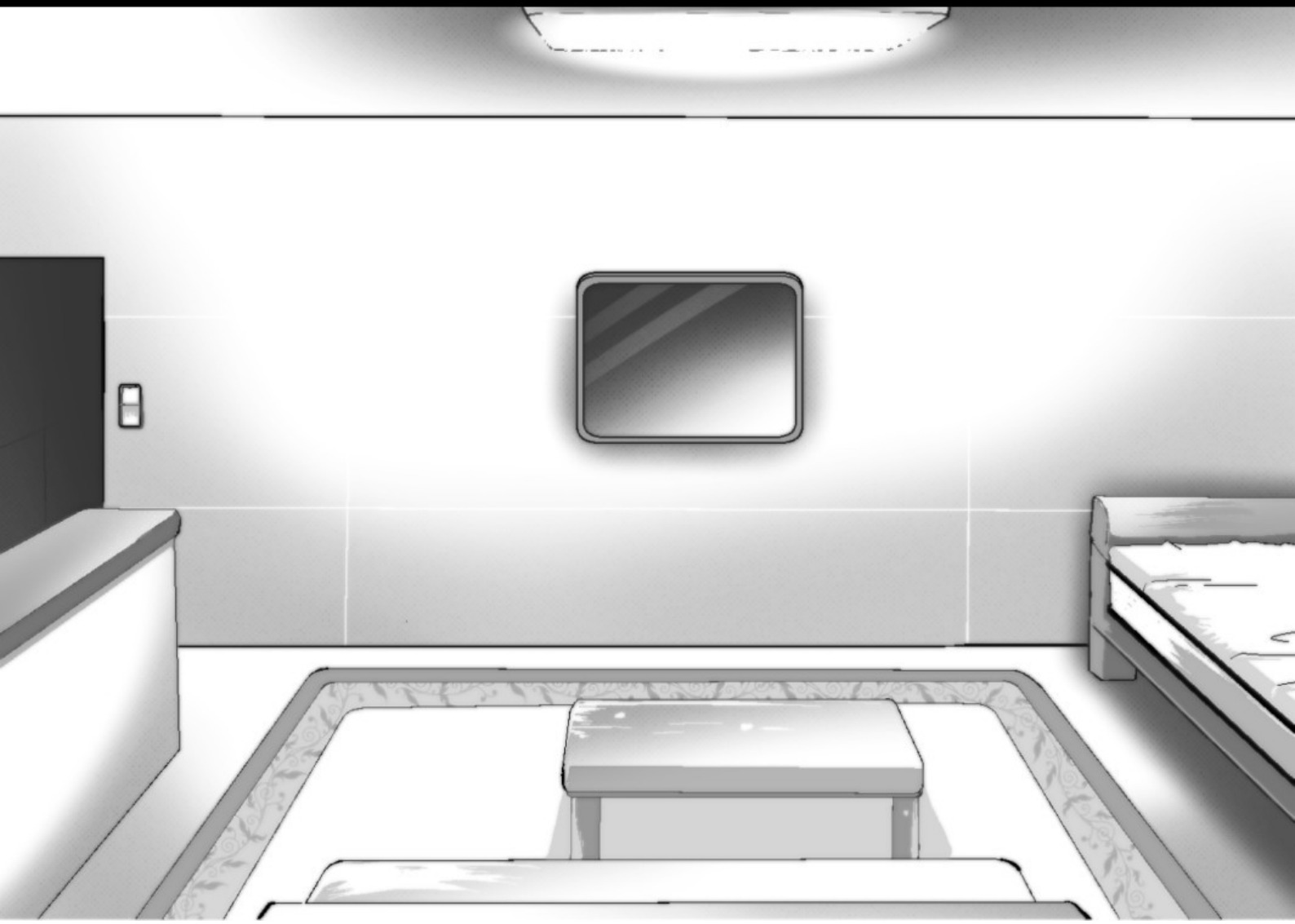
最低限の家具、生活を監視するための
簡易個室のようで、妙に整っているのが
逆に不気味だった。

状況がまったく理解ない友馬。

夢なのか現実なのか、その境目すら曖
昧だった。

友馬「……さっき!!」

よく見たら向こう側でさつきが横にな
っていた。吉田先生もいる。



友馬「痛って……！」

近づこうとした友馬は何かにつつかった。

???何も無い……。

が、明らかに手に何かに触れた感覚がある。硬い何かが。

それは分厚いガラス面のようなものだった。

見えない何かが壁一面に張り巡らされていて、向こうに、さっきのほうへ行くことができない。



さつき「ん…」

吉田「…ぐっ」

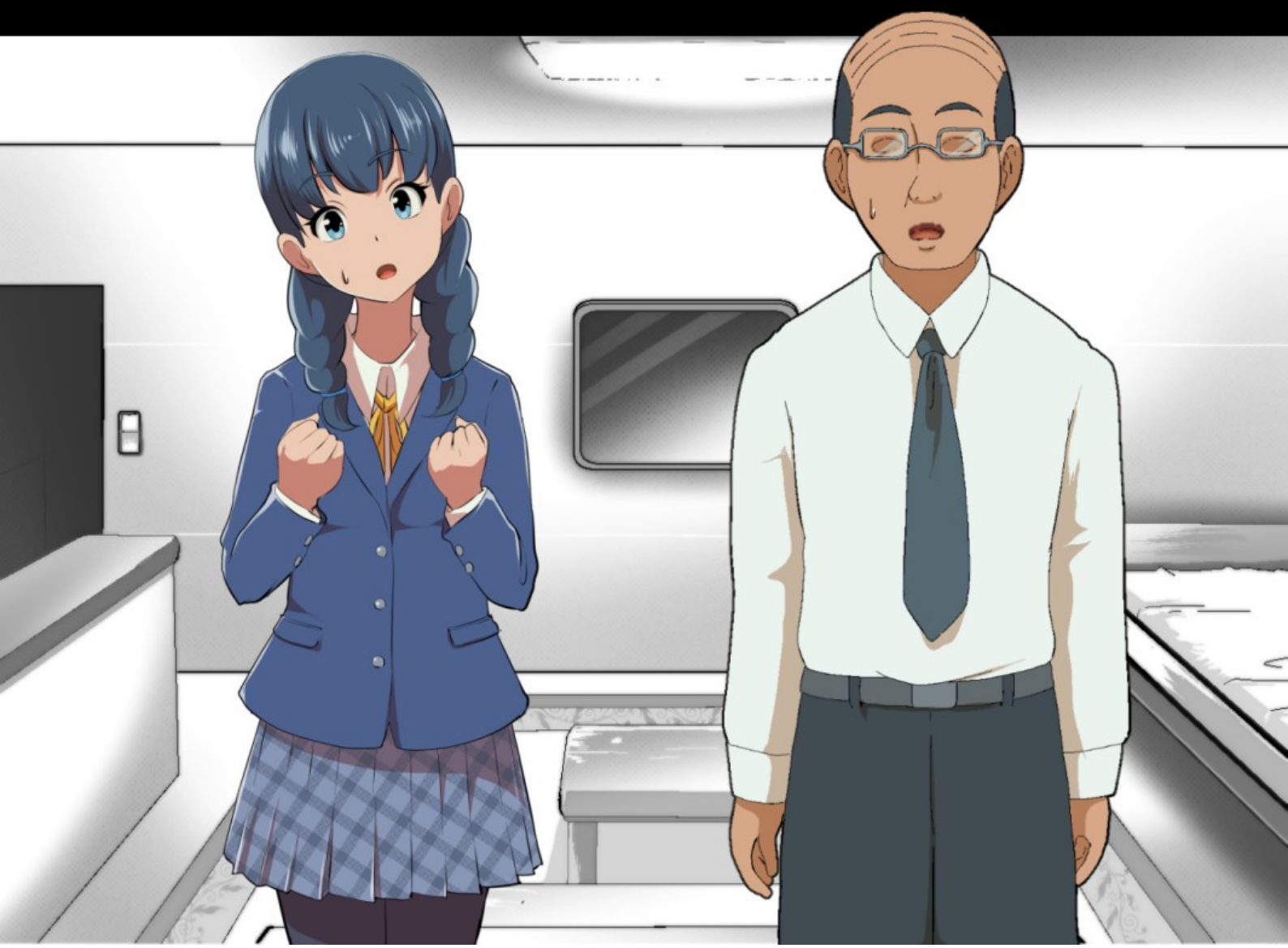
二人が目を覚ました。

まだ意識がボーっとしているようだったが置かれている状況を確認して徐々に動揺しだしているのが分かった。

さつき「…なに、ここ…??？」

吉田「…平森、怪我はないか？」

さつき「は、はい…」



吉田は教師として教え子の安否を確認する。

状況だけに友馬には吉田のそんな行動が頼もしく思えた。

しかしこの状況は未だに意味が分からない。

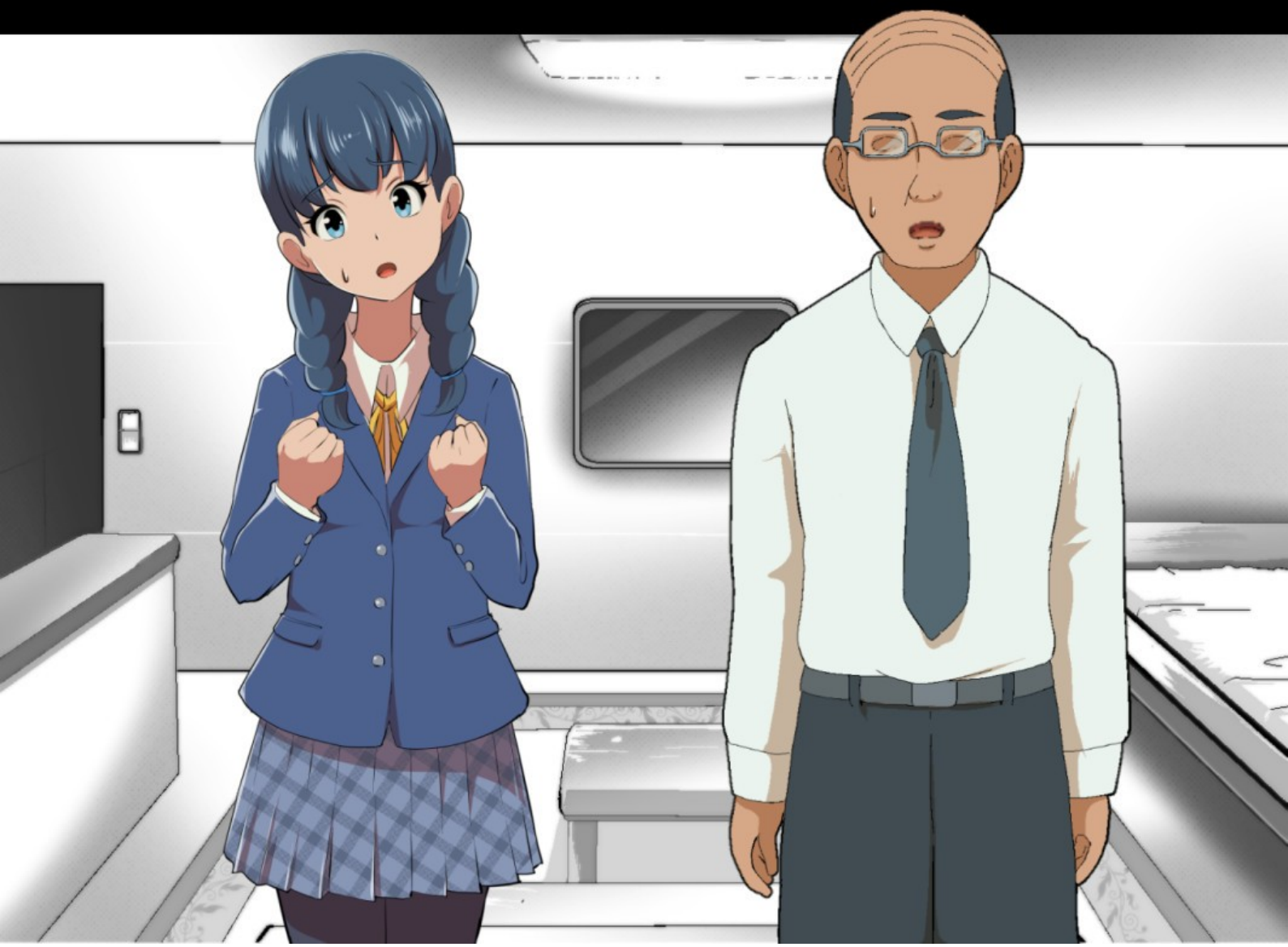
さつき「~~~~~?」

吉田「~~~~~」

二人は不安そうな表情を浮かべながらあれこれ会話している。

友馬「…」

…友馬がそれ以上に先ほどから不思議に思っていること。



友馬「二人とも…なんで俺のこと無視して
るんだ…？」

会話がかみ合わない、というより友馬の
会話だけがまったく干渉されていない。

友馬は見えない壁をコンコン叩く。

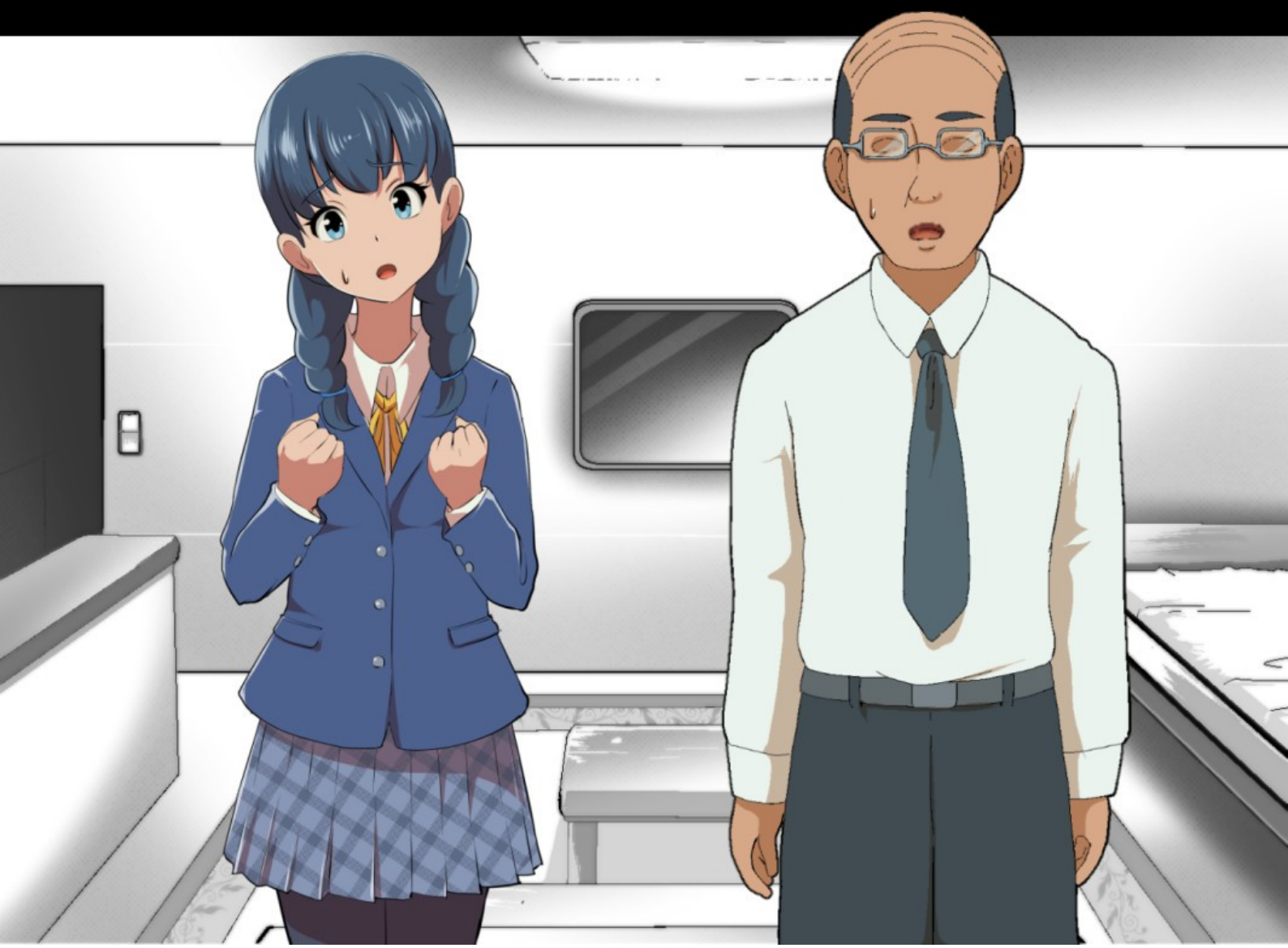
まったく見向きもしない二人。

他にもいろいろ試してみた。

友馬「…！」

結果、この見えない壁は…正確には限定
的に見えない壁は、

**【ヤツキと吉田の二人にだけ友馬の姿が
全く見えていない】**



友馬からは二人のことも、二人のいる空間もすっかり確認できる。

しかし二人からはなぜか、友馬側が一切見えていないようだ。

こんなことがあるのだろうか。

マジックミラーと呼ばれる物もあるが

それとは完全に似て異なるモノだ。

科学的に見えないのではなく、魔法のような、まるで説明のつかないような感じだった。



その折、壁に掛けられたテレビモニターが急に点いた。

これ見よがしというか、いかにも意味ありげに設置されていたモニターだ。

『イチャラブバカップルに

ならないと出られない部屋』

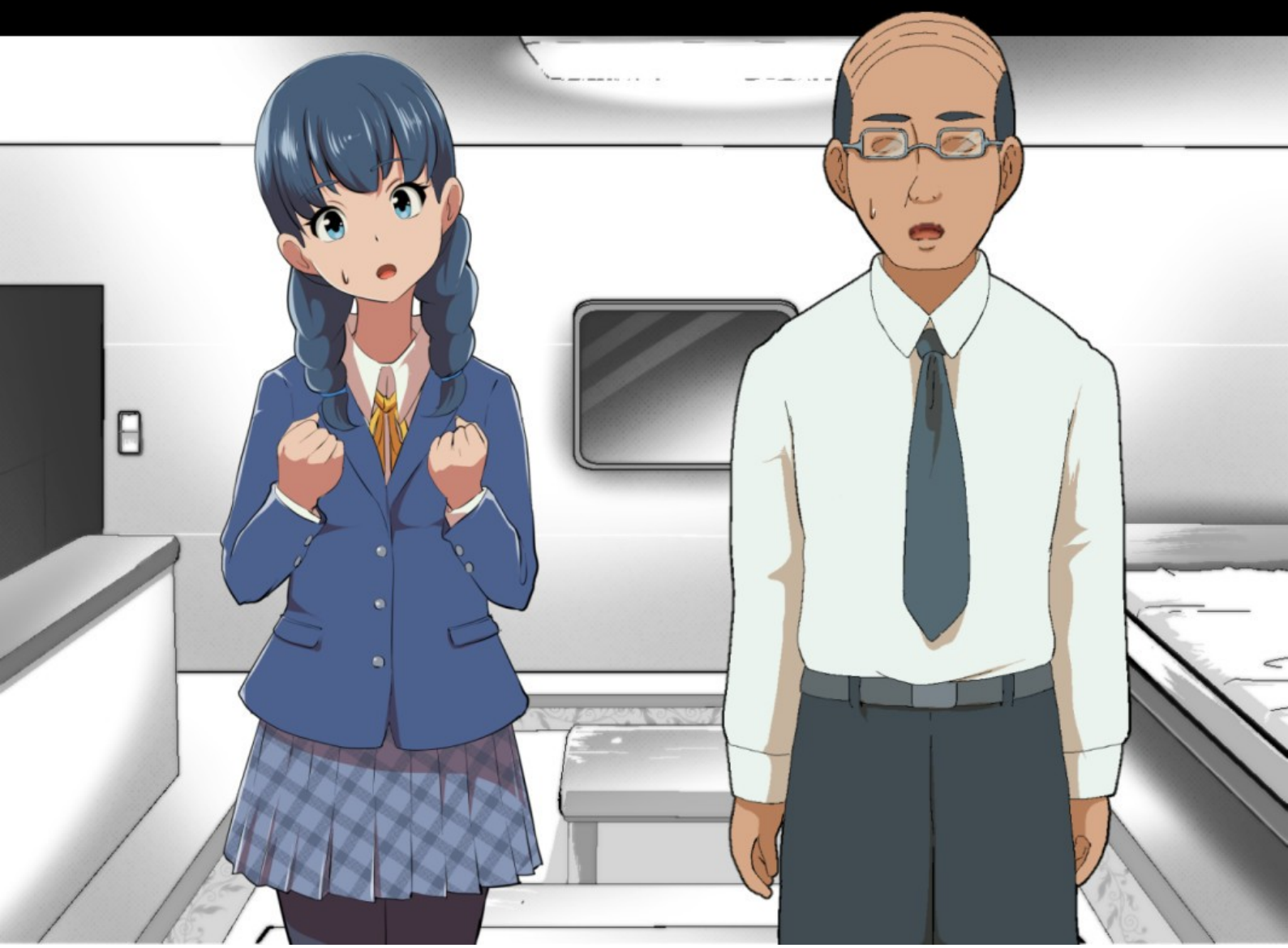
『この部屋から出る方法はただひとつ。

二人が相思相愛の

イチャラブバカップルに

なることです。

頑張ってください。』



そうメッセージが表記された。
続けて追記される。

『「イチャラブバカップル関係」とは……』

・定義はありませんが、互いに心から

相手を愛し合う状態になること

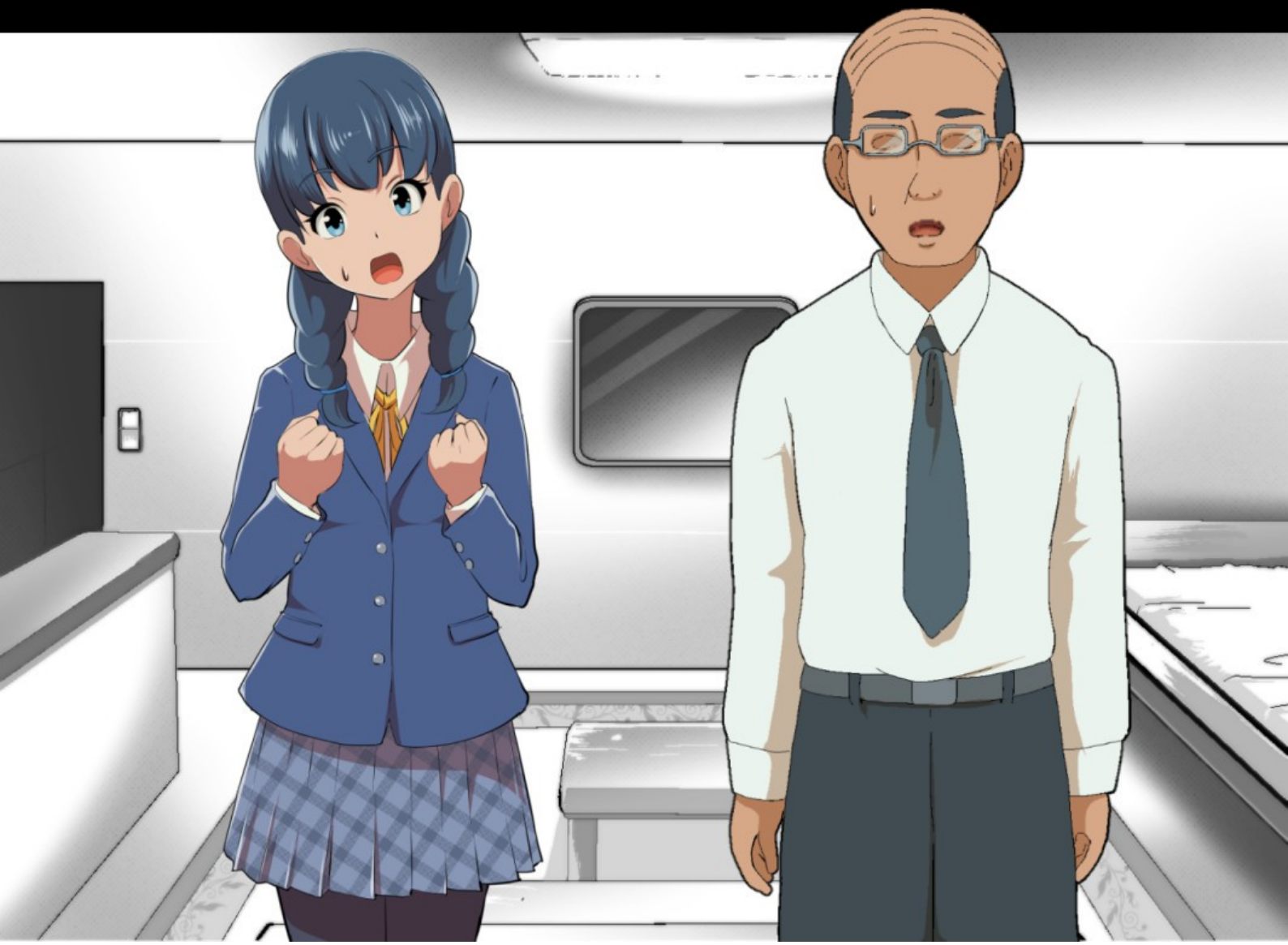
・心の繋がりであり、形としての

繋がりでもあること

———この二つの条件を

満たすことです

表記されていたのは映像ではなくメッセージのみだった



友馬はその内容を見て固まっている。

が、向こうから聞こえてきた声でハッと意識を戻す。

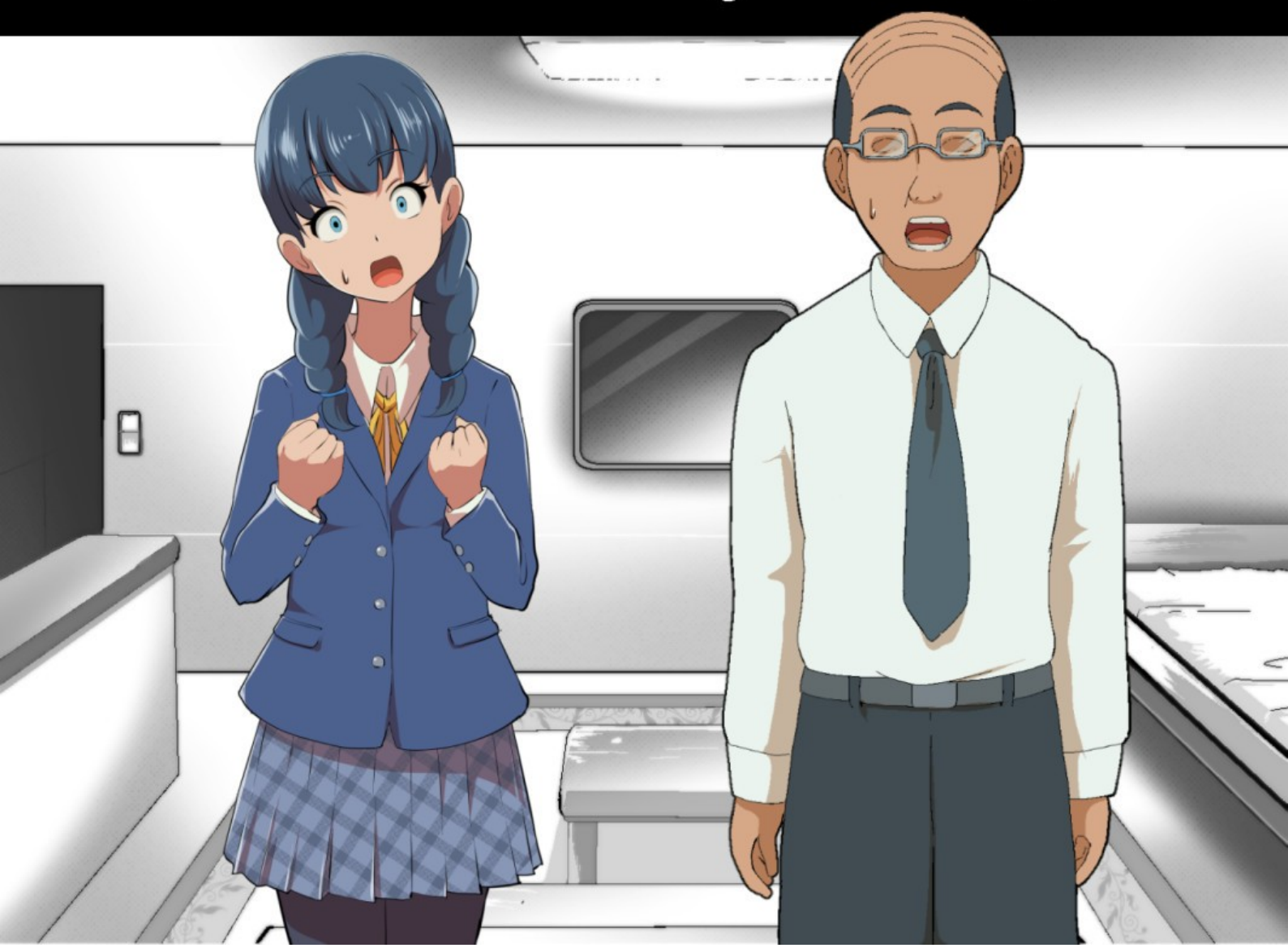
幼馴染の、聞き慣れた声だった。

友馬（…二人は俺がいることに気づいてない…つまり）

さつき「イチヤラブ…って、」

吉田先生…と?」

吉田「…」



必然的にその形になってしまう。

友馬は吉田に対して信頼は置いていた。

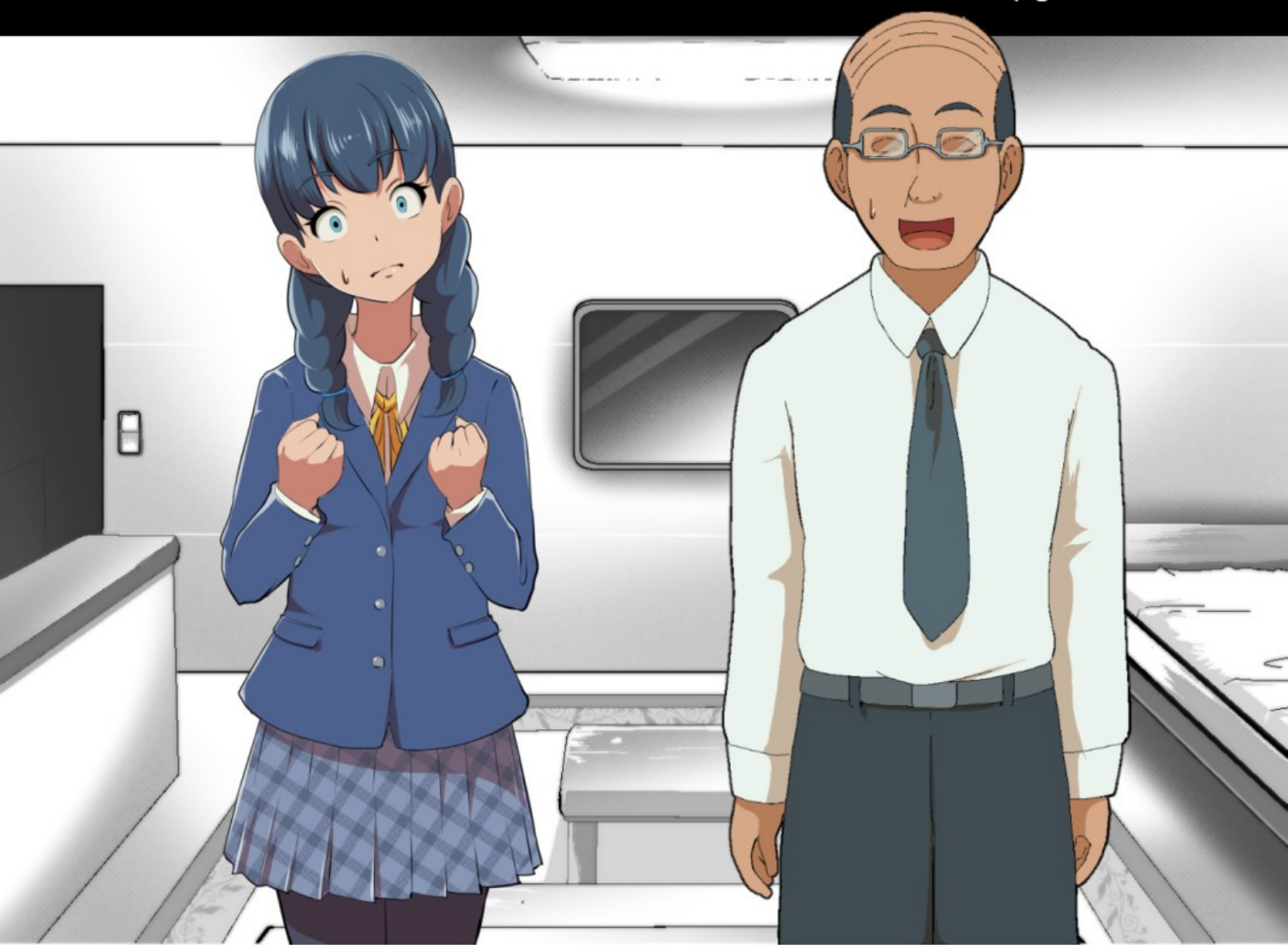
生徒に絶大な人気のある楽しい先生、なんて印象はないが実直で大らかな先生だ。

…絶対にそんなことは起こらない…はず。

吉田「…大丈夫だ平森、必ずここから無事に脱出しような」

幼馴染と担任の中年教師との疑似的な2人暮らし。

その様子をただ傍観するしかない友馬の奇妙な生活が始まった。

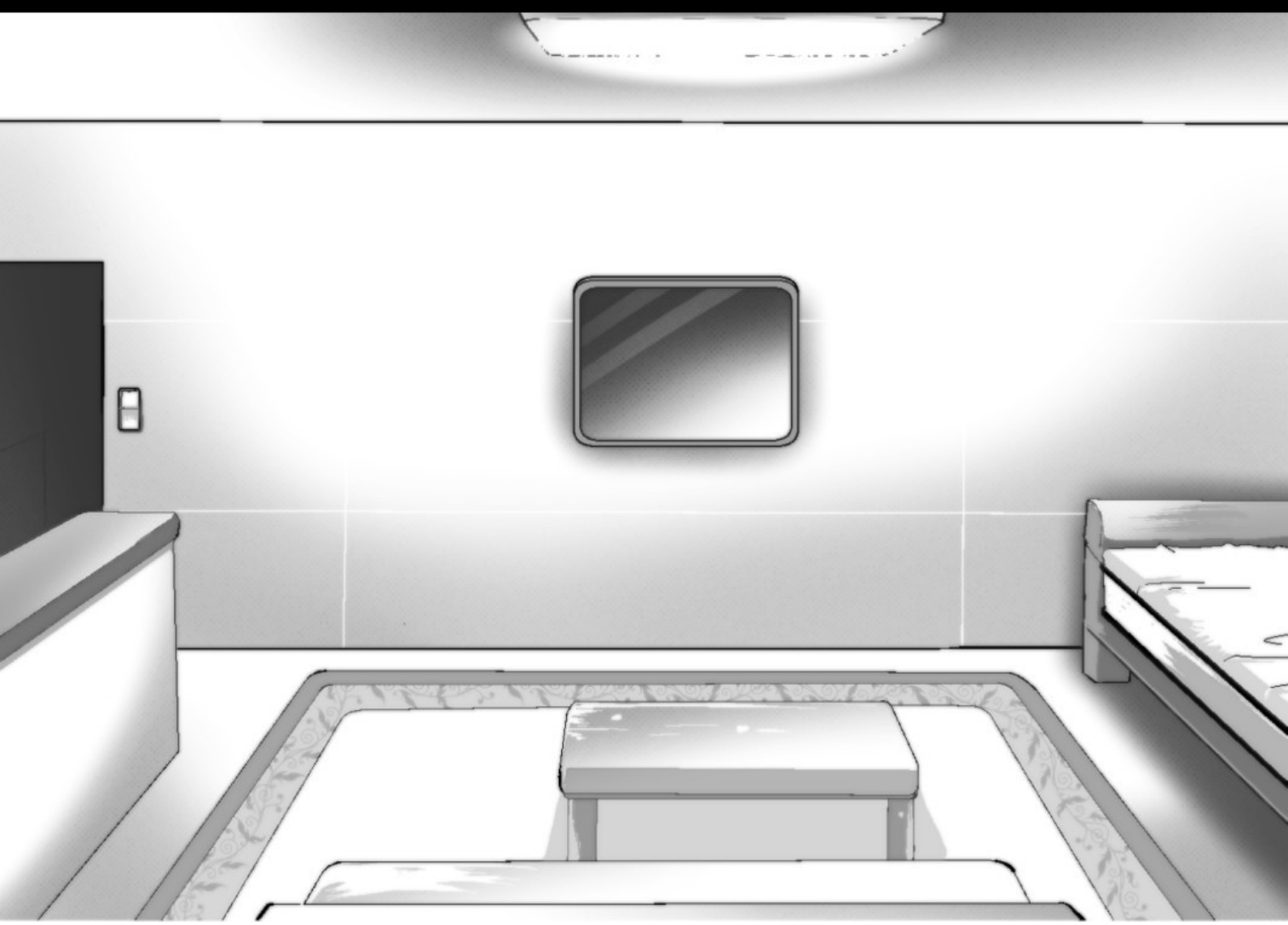


風呂、トイレ、食事、睡眠。

人としての最低限の生活リズムを
繰り返すと何となく落ち着きは出て
くる。

あれからとにかく部屋中散策した
が、ドアも窓もなかった。

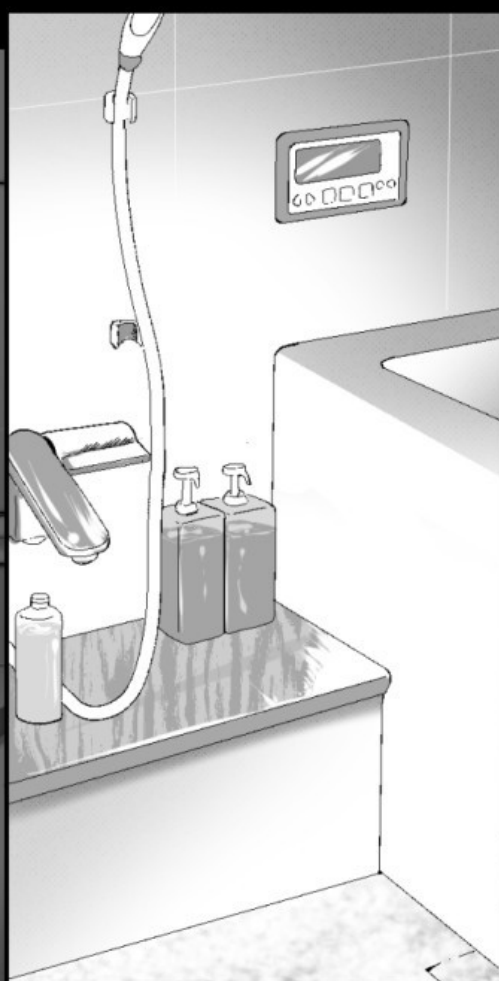
出口が一つもない。



電気や水は通っているようだった。

風呂やトイレといった最低限の設備どころか洗濯機や乾燥機、冷蔵庫に電子レンジなどなんでも備え付けられていた。

奥まったところに飲み物や食料、ティッシュやタオルなどが積まれた小部屋があった。



不思議なことに食べ物や日用品はどれだけ消費してもいつの間にか補充されている。

出たゴミも気づかない内にキレイさっぱりなくなる。

空調も整っていて快適な室温だった。

暑くもなく寒くもない。

娯楽と出口がないこと以外は不気味な程、生活環境が整い過ぎていた。が、外部との連絡手段は一切ない。

そして、さつきと吉田の二人と友馬を隔てる見えない壁もそのまま変化はなかった。



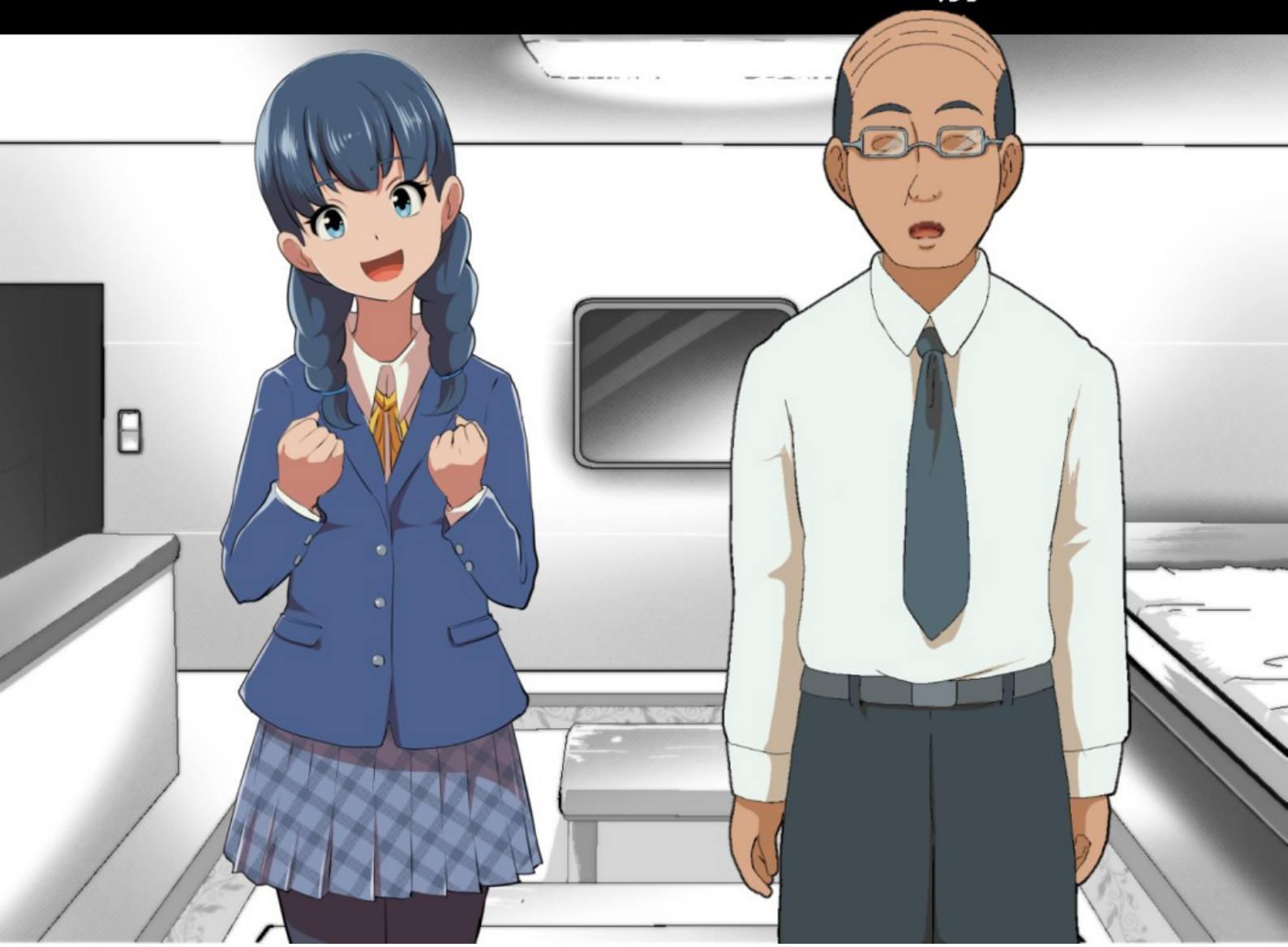
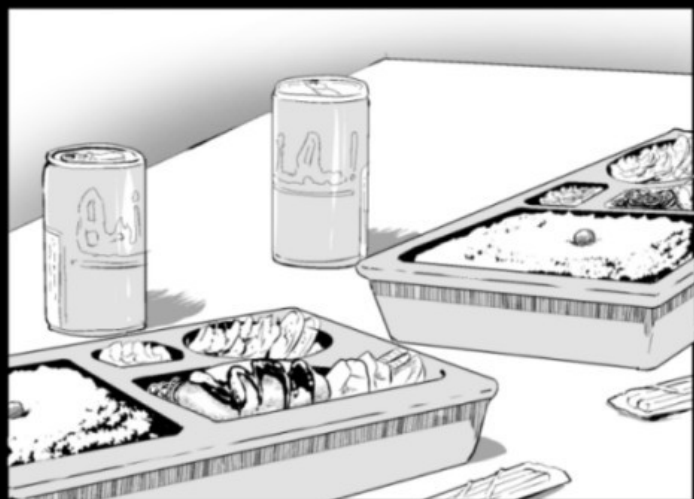
さつき「先生、今日は何か食べたいものありますか？っていつでも全部レトルトとか冷凍モノですけど」

吉田「ああ…そうだな今日は…というか別に平森が毎回やらなくていいんだぞ」

「そういうのは交代制で…」

さつき「いえ、何かしらやってる方が私も気が紛れるんで♪」

吉田「そうか…」



二人はとにかく会話していた。

他にすることもないので必然的にやり取りが多くなる。

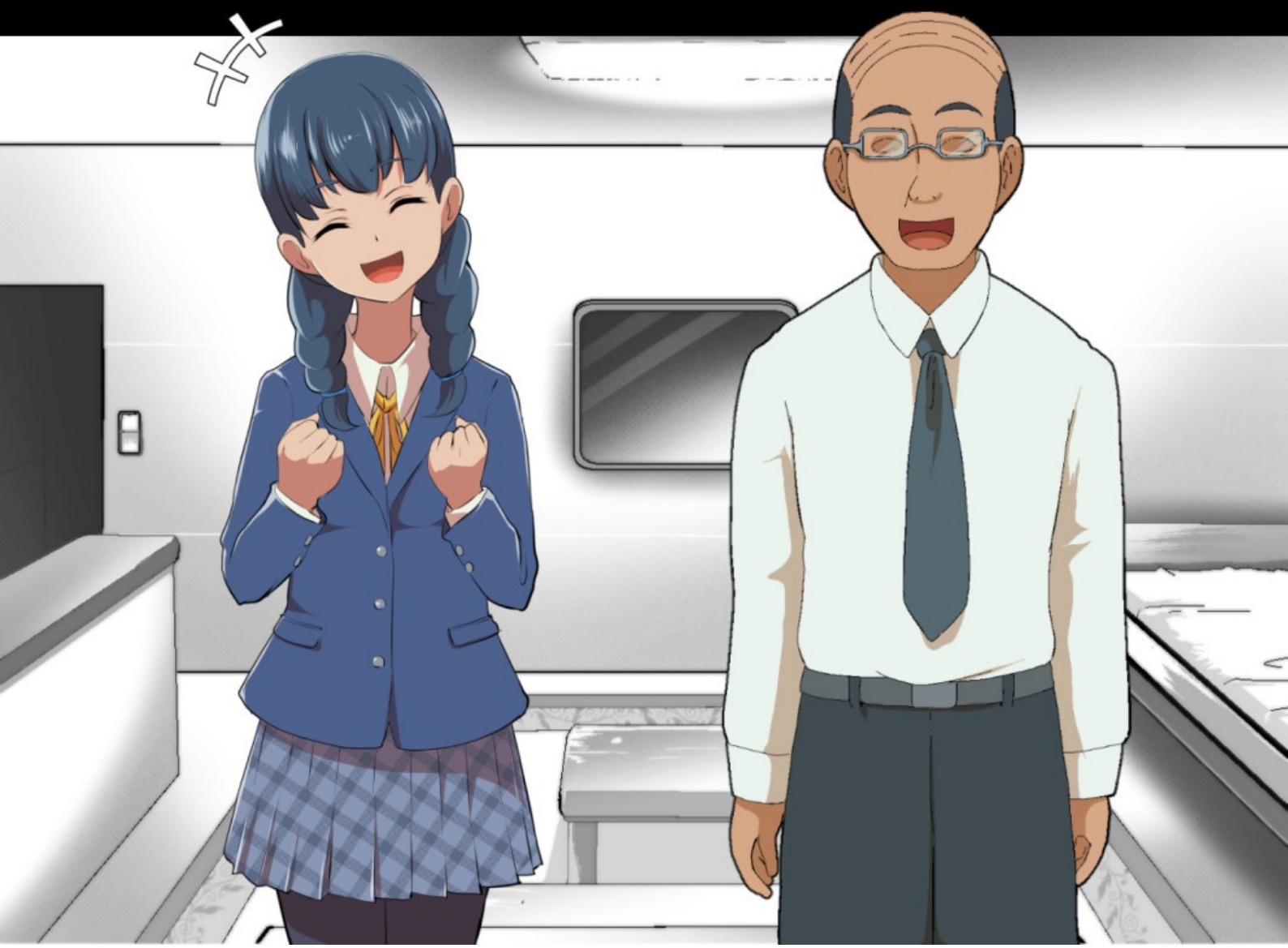
吉田「懐かしいな、俺が平森くらいの際にやってたんだぞ」

さつき「最近リメイクされたんですよ、クラスでも結構好きな子いて」

好きな物、最近のドラマや映画、流行っている動画などなんでも話題にする。

閉鎖空間での精神面を安定させる行為としてコミュニケーションは大事だろう。

友馬も会話に参加は出来ないが、聞いているだけでも気晴らしになっていた。

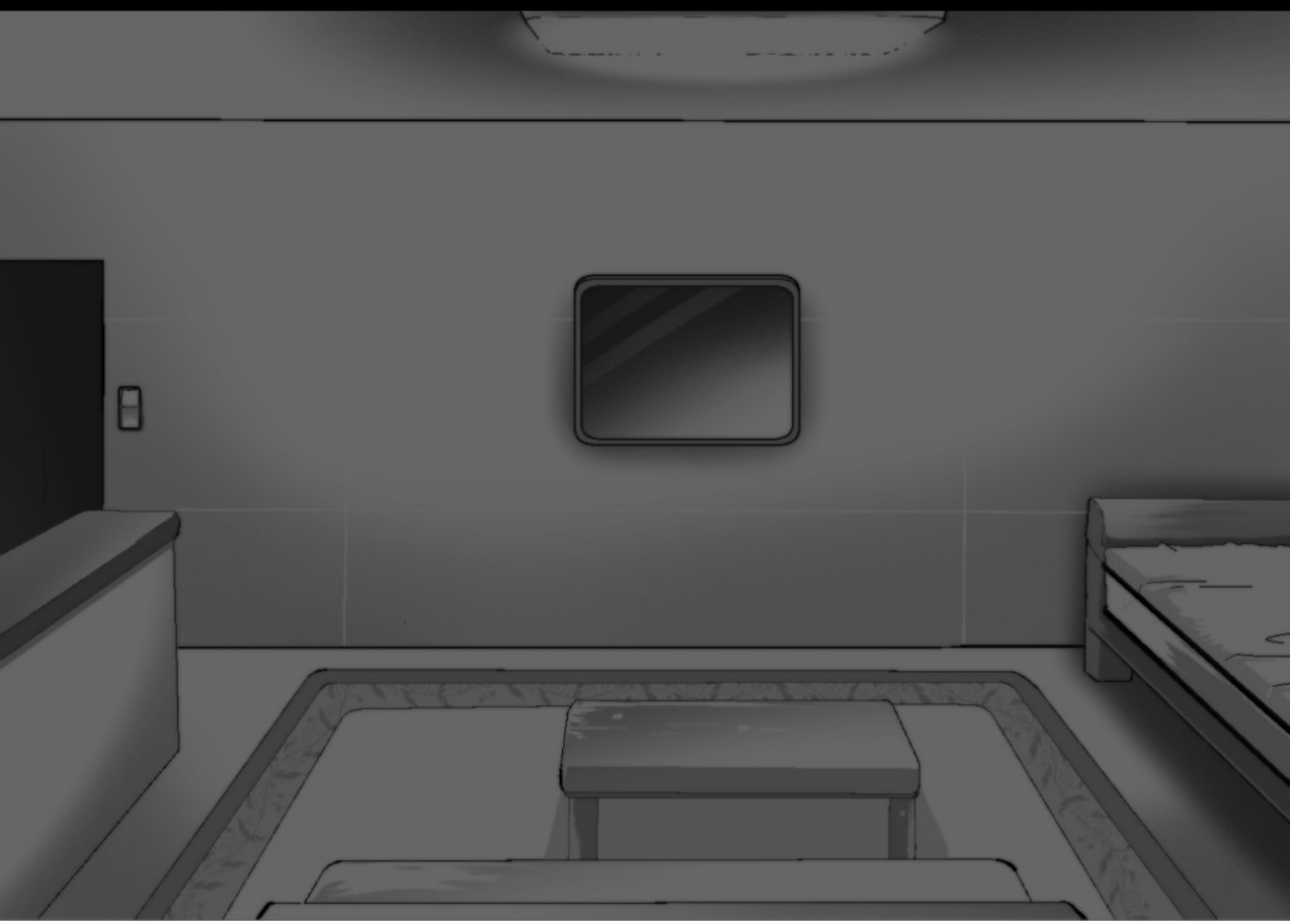


さつき「先生おやすみー」

吉田「ああ…おやすみ」

寝る時はさつきがベッド、吉田はソファで寝ている。

さつきも気を遣ってか何度も本当に自分が使ってしまった方がいいのか聞いていたが、立場を考えてのことなのか吉田はさつきに使わせていた。



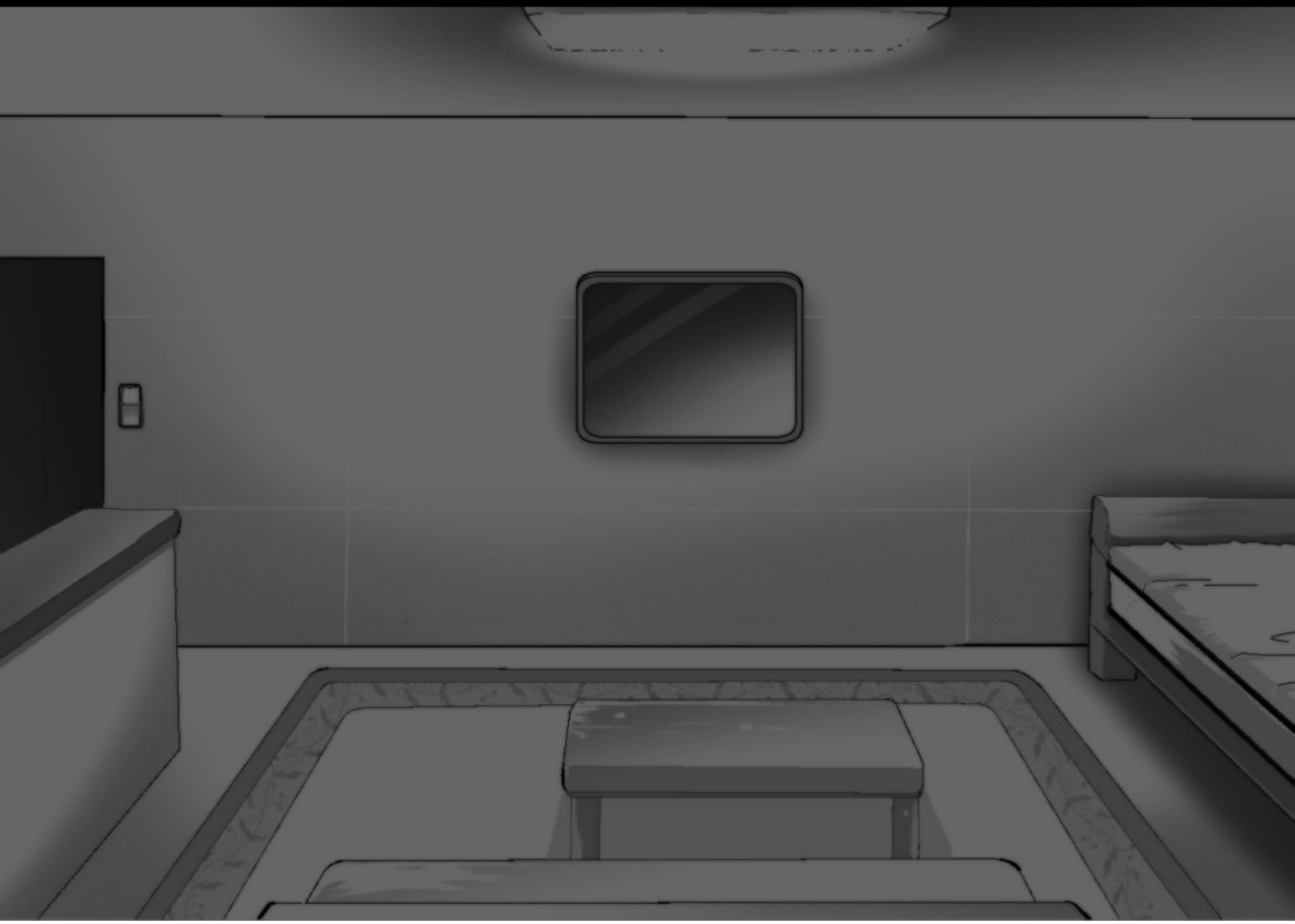
初めの頃は着の身のまままで寝ていた
が、探っていたら寝巻きを見つけた。

無地の特にこれと言ったデザイン性
もないモノだったが、吉田はただでさえ
寝心地が悪かったので、せめて着心地く
らいは快適でいようと抵抗することも
なく着た。

さつきも吉田が着たのを確認してか
ら洗面所に行って着替えていた。

電気を消してからも二人はポツポツ
話していた。

友馬も壁越しではあるが会話を聞い
ている。



さつき「先生と一緒にでよかったです」

吉田「え？」

さつき「こんな訳分かんない目にあって、どうなっちゃうんだろって思ってたんですけど、先生がいてくれたから安心できました」

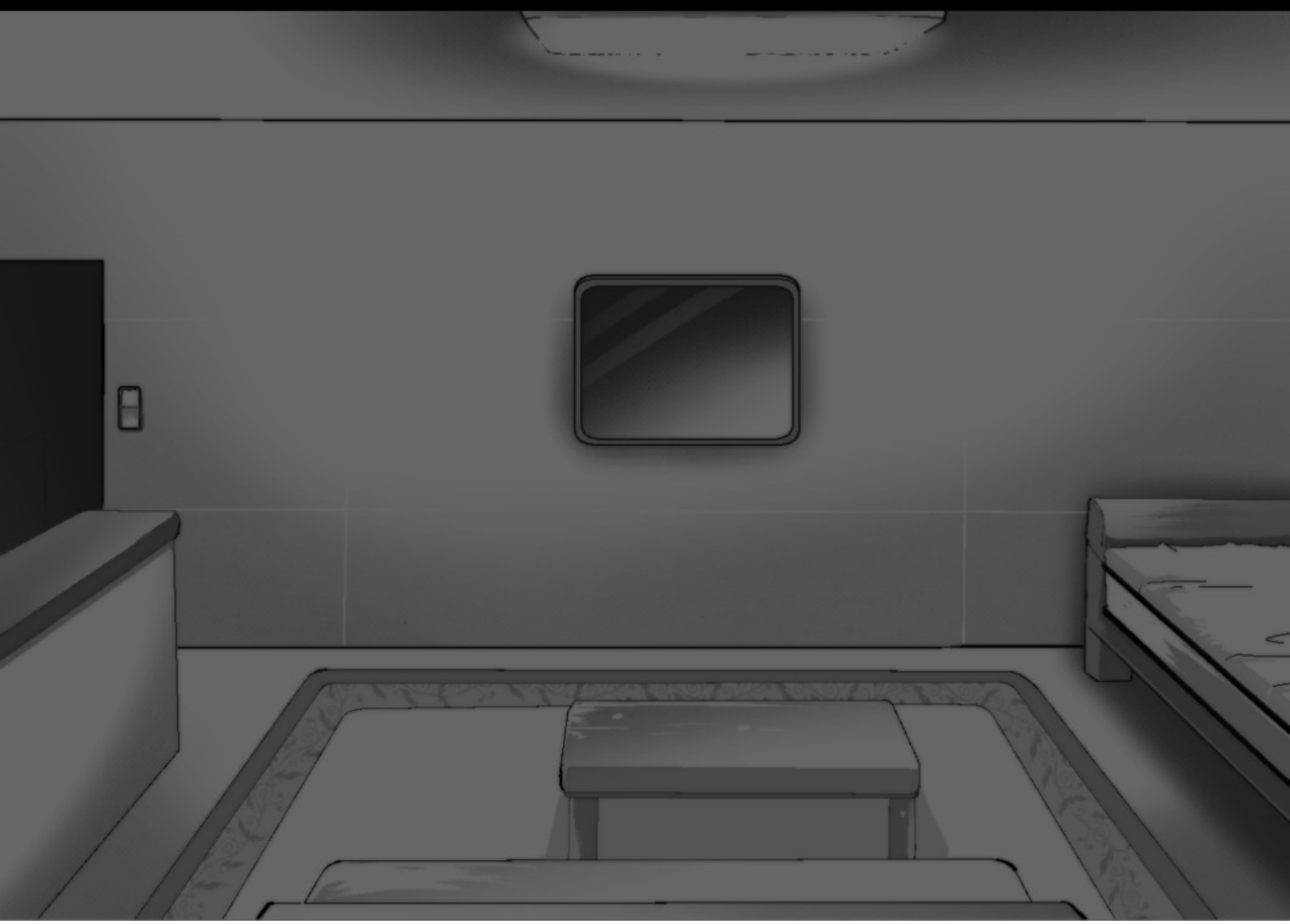
「全然知らない人だったら怖すぎますし」

吉田「中年教師と二人きりというのも中々だぞ…」

さつき「先生って実は話してると結構面白いですよ♪」

吉田「…」

「…山野と一緒にだったら、むしろ二人きりで過ぐせるし良かったんじゃないか？」



いきなり自分の名前が出てきて驚く友馬。

ウトウトし始めた頭で壁越しにぼんやり会話を聞いていたが、パツと目が冴えてしまった。

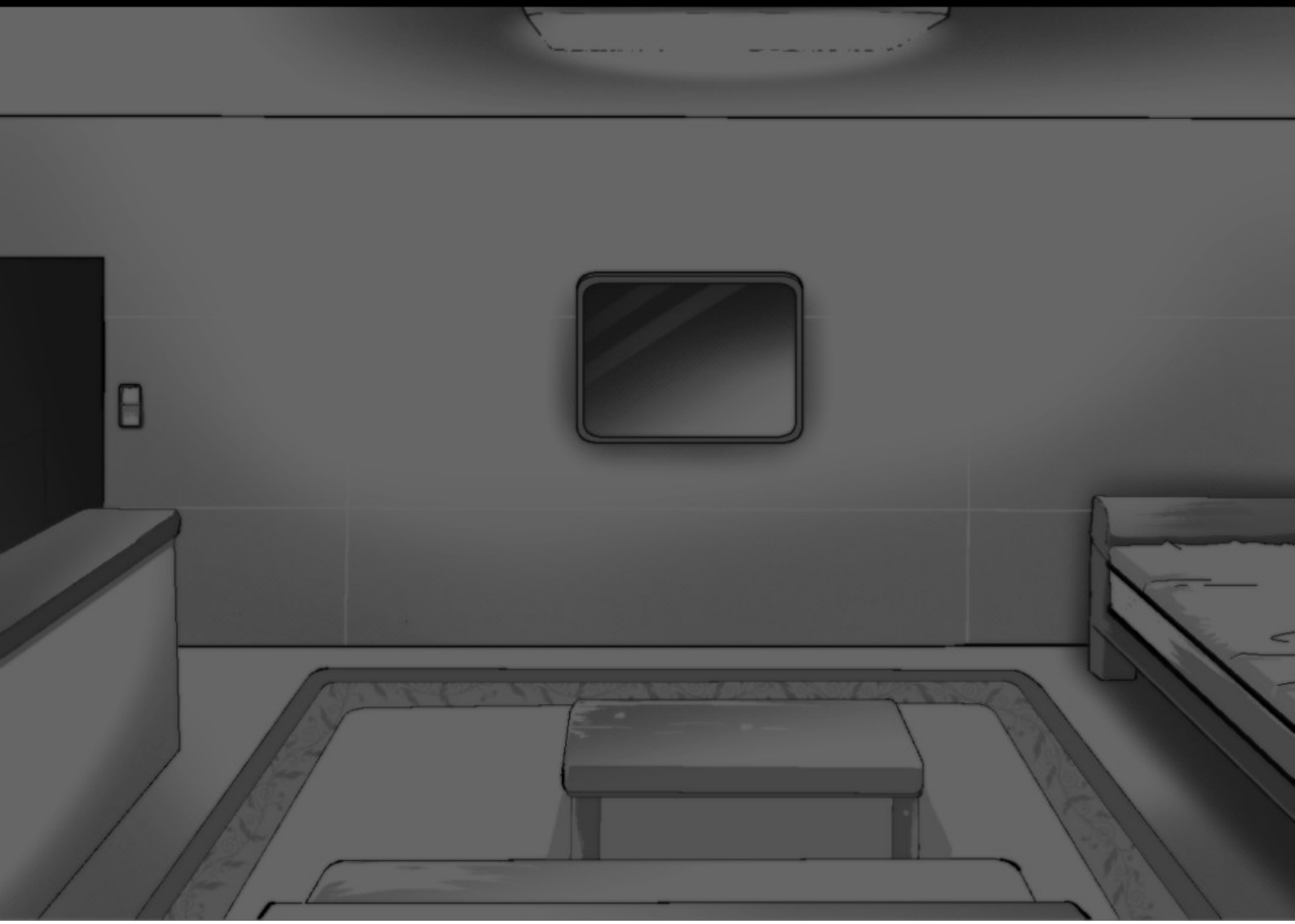
さつき「ゆ、友馬と一緒にいるなんて今さら特別な事でもないし…別に何でもないですよ!」

吉田「本当にか?」

さつき「…おやすみなさーい」

吉田「…おやすみ」

友馬「…」

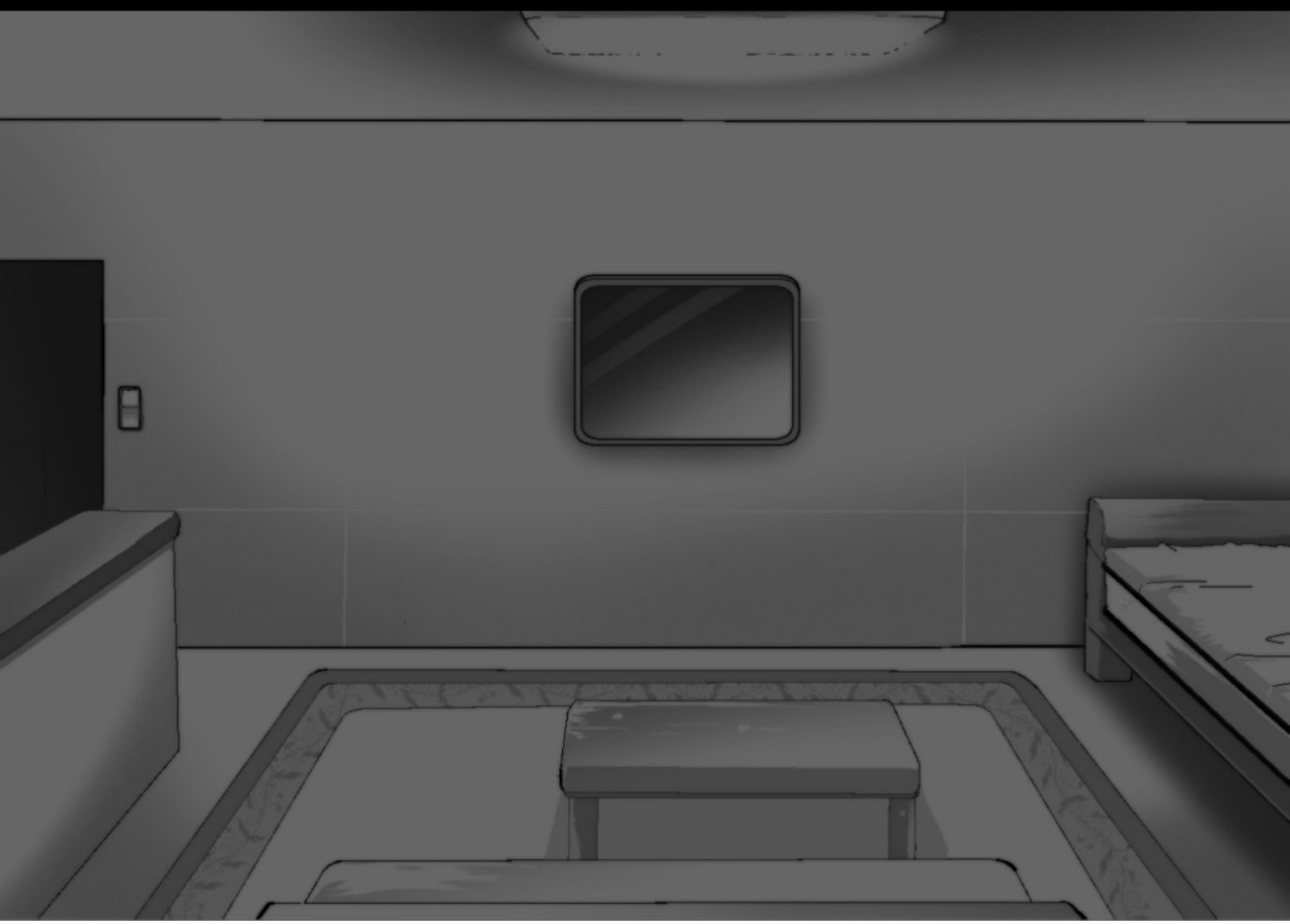


慌てるように会話を断ち切って布団を被ったさつき。

思惑は汲み取れなかったが、見るからに動揺していたのが友馬は少し嬉しかった。

友馬「…おやすみ、さつき」

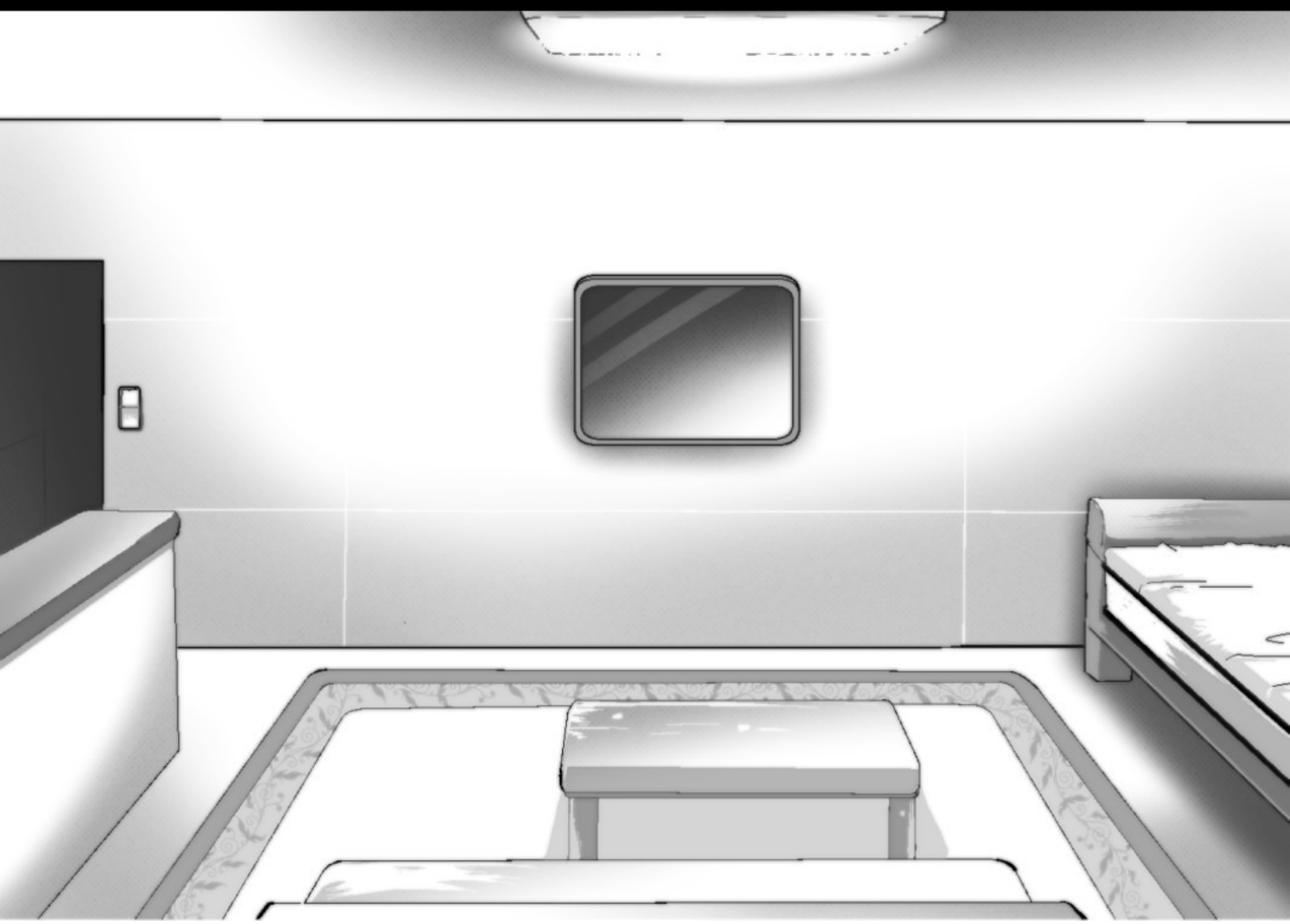
非現実的な状況下であつてもリアルな生活感の繰り返し心がなだめていくのだった。



——が、何の脈絡もなくそんな生活は大きく変化した。

吉田「…」

さつき「先生、やめてください……とりあえず頭上げて…」



友馬「…？」

数日が経ったある時、壁越しに見えたのはさつきの前で頭を下げる吉田の姿。

友馬が色々考えながら長めの入浴を済ませ、部屋に戻ってきたら、なぜかそんな状況になっていた。

何がどうということなのか友馬にはまったく把握できない。

さつきも理解できていない感じだった。



吉田「すまん、平森」

さつき「あの、謝られても何のことなのか分からなくて…」

「教えてもらえますか…?」

吉田「…教師として、いや男として最低なこと言っが」

「聞いてくれるか」

さつき「…はい」

吉田がさつきに言った事。



こんな閉鎖空間で女の子と二人きりで
過ごしていたら、どうしてもそういった邪
な気持ちが出てきてしまう。

教師という立場で生徒に絶対に向けて
はいけない感情。

こんなことを面と向かって言われても、
さつきからすればただ気分が悪くなるだ
けの自供でしかないこと。

…自分を信用してくれていた生徒への
裏切りであり、失望させる言動だと自ら告
げる。



友馬も壁越しに吉田の自供を聞いていた。

吉田は顔を上げない。

さつきはそんな吉田の肩に優しく手を添える。

さつき「先生、正直に言ってくれてありがとう
とびげいます」

なぜかお礼を言った幼馴染。

さつき「はつきり言って、ショックではありません。吉田先生が私のことそんな風に見てたなんて…」

吉田「…」

さつき「…でも」

友馬「…？」



さつき「お、男の人がどうしてもそういう気持ちで自分を抑えられなくなっちゃうのも仕方がないというか…」

「先生も頑張って我慢していたんですよね…?」

「生徒の手前、自分で…その…せ、性欲処理も出来なくて苦しかったんですよ…?」

吉田「平森…」

どう考えても教師として許されるような言動ではなかった。

しかしさつきは吉田の告白をしっかり受け止めた。



さつき「…吉田先生、こればかりは先生の口からちゃんと言ってほしいです」

「私と、どうしたいですか？…私に何をしてほしいですか…」

さつきが吉田と顔を合わせ真正面からそう伝える。

吉田もそのさつきの揺れ動く瞳に視線を合わせる。



吉田「…平森と、エロい事がしたい…」

わしき「…」

吉田「…」

わしき「…」

友馬「…」

わしき「……さくらんぼ」

友馬「…っさ、しき…」

わしき「さくらんぼごめん……HROSSU」



さつきは確かに了承した。
担任の中年教師からの要求に答えた。
こんな閉鎖空間にいたことで精神状
態が麻痺しているのだろうか。

でもそれは友馬自身もそうなのかも
しれなかった。

なぜか怒りや動揺するような気持ち
はあまり湧かなかった。

幼馴染と担任のそのやり取りをただ
ひたすら傍観するだけだった。



仕方がないじゃないかと。

通れない壁、届かない声を言い訳に
するようになって。



二人はベッドに横になりお互いの身体を寄せ合う。

吉田はさつきの黒タイツの両脚を自身の脚で挟み込んでいる。

吉田「平森……」
さつき「んっ……先生……」

キスをしていた。

吉田が顔を寄せると、さつきは目を丸くして数秒考えこむような表情でいたが、そのままさつきからも顔を近づけて唇を合わせた。



目の前で幼馴染のファーストキスがさつさと済まされた。

エロい事、とはいったがキスだけは別だと友馬は思っていた。

しかし、いの一番にやりだして、幼馴染はそれをしっかり受け入れた。

何度も何度も繰り返す続ける。

さつき「ふう…先生…もういいですか…？」

吉田「…」

さつき「んっ…もう」

そろそろ吉田も満足したかと、さつきは呼吸置くが吉田はまだ唇を求める。



さつきは仕方がないという体であるが
行為に付き合ってくれ。

吉田が満足するまで。

友馬「…」

お人好し過ぎるさつきならそうしてくれ
るのだろう。

幼馴染の友馬だからこそ分かったことだ
った。



…吉田は、優しいさつきなら、思いっきり頼み込めばこういった行為でも受け入れてくれると、分かっていた上で自供したのではないか。

友馬はフツと思った。

思っただけで誰に伝えるでもない事。

干渉できない見えない壁があるため。

そう理由づけて。

真意がどうであつても目の前で幼馴染が担任教師とキスをしているのは事実だった。



わしき「…すっけい……」

吉田「見たことあったか…？」

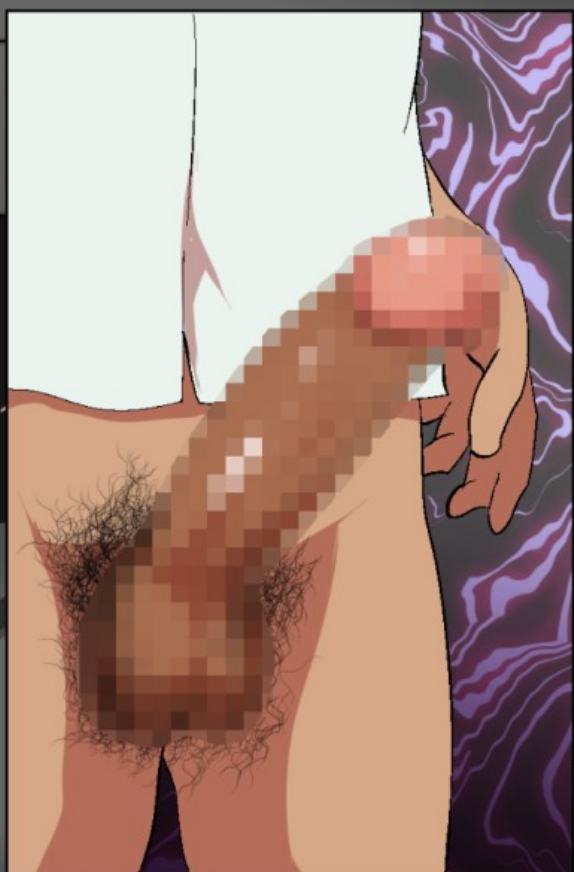
さつき「…かなり小さい頃ですけど、一緒にお風呂入った時にお父さんのとが…」

ゆ、友馬のとが」

吉田「…山野のと比べてどうだ…？大人の
本気の勃起ちんぽは」

さつき「そ、それは…当時はめちやくちや

子供だったし比べるようなことじゃ…！」



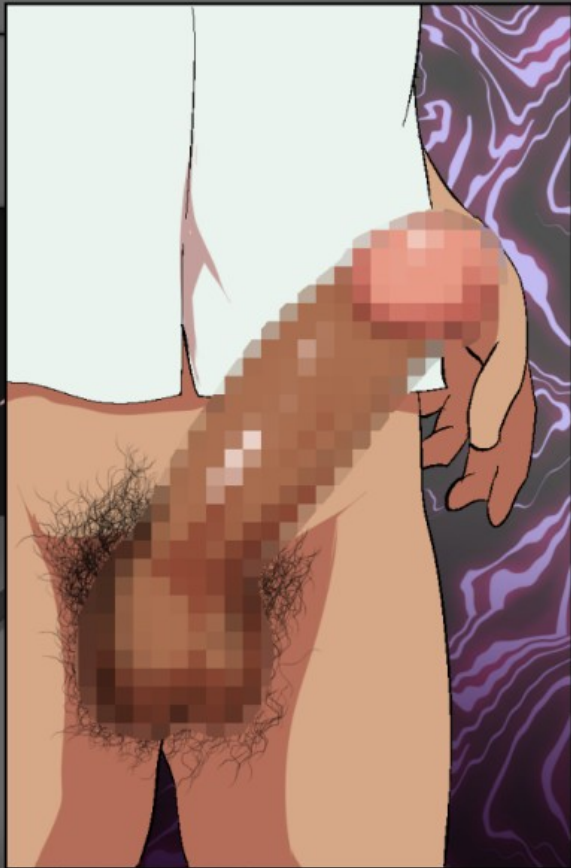
吉田「頼む、言うだけでもいいから…山野と俺のちんぽ、どっちがすごい…」
さつき「…」

「…先生の…大人おちんちんの方が、大きくて…すごいです」
友馬「…」

吉田はそうやって、さつきに自身のソレについて色々言わせていた。

「先生の大人おちんちんカッコいい」「先生の長いおちんちん素敵」など、律儀に言葉にしていた。

さつきの口からおちんちんというワードが発せられているのが友馬も内心、ざわつくモノがあった。



ちつき「う、こんな感じですか…?」

吉田「ああ、どうぞ…ゴシゴシしてくれ」

吉田はちつきに自身のソレを握らせる。

その際、一ツ指示していることがあった。

ちつきの履いている黒タイツを腕に着けて、ソレに巻き付けるようにしてくれと。

ちつきは吉田の意図が分からずとも要求された通りになってくれる。



さつき「…これ気持ちいいんですか」

吉田「気持ちいい…」

さつき「…先生つてもしかしてタイツフ

エチっなんですか?」

吉田「うん」

さつき「いやうんって…(笑)」

吉田「黒タイツが特に」

自身の性癖を正直に答える担任に、思わず少し笑ってしまったさつき。

さつき「黒タイツなんて冬になればみんな履くでしょうし…もしかしてみんなのことそういう目で見てたんですか…?」



吉田「いや…フエチなりのこだわりという
か…厚手のちよっとダサい感じのが好き
なんだ」

「田舎っぽいとかイモっぽいダサさ
の厚手黒タイツが」

吉田「平森の黒タイツは百点満点の黒タイ
ツなんだ」

さつき「褒められてるのかなソレ…」

吉田「パンパンに膨らんで喜んでる俺のち
んぽが何よりの証拠だぞ」

さつき「そーですか」



先ほどファーストキスを奪った中年教師相手に少し呆れ気味の態度で接するさつき。

性欲処理の手伝いという教師と生徒の関係上あってはならないことをしているのに、妙に緩い空気が流れているように感じた。

吉田「あ、イクっ！平森…イキそうだ…！」
さつき「えっ！イクって…あの、私はどうすれば」

吉田「そのままゴシゴシし続けてくれ…
あと、なんか必殺技っぽく叫んでくれ…頼むっ」

さつき「な、なんですかソレ!?どひひひひひと…」



吉田「平森…本当にイく…!!」

わしき「えいこ…えーと…く、く、ええ!!」

【サツキ黒タイツパンチラっす】=!!

吉田「~~~~っ!!」

吉田の指示で即興でそんなことを口にしたさつき。

吉田も満足したのか思いつきりイっているのが分かった。



さつき「わっ…溢れてきてる…」

厚手の黒タイツも貫通するような勢いでその先端部分からじわあっと白濁色の粘液が滲んできた。

さつきはその様子を興味深そうに観察している。

黒いタイツと白濁のザーメンのコントラストがより官能的だった。

吉田「ハアハア…めちやくちや気持ちよかったぞ平森…」

さつき「よ、よかったですね」



吉田「…【サツキ黒タイツハッパッパ】…いい必殺技だ…」

さつき「ちょ…言わなくていいですよ！

うう…安直すぎて何か変にハズい…」

さつきは精子まみれになった自分の黒タイツを前に吉田と碎けた感じで会話していた。

張り詰めるような、硬い空気はまるで感じなかった。



吉田の精液で染められたタイツは洗濯した。

が、ここを管理している人物か、はたまた人物でもない、ナニカ、に黒タイツも必要品と認識されたのか、備蓄室に分すぎるほどの数がいつの間にか積まれている。

さつき「よかったですね、先生好みの極厚ダサダサ黒タイツですよ(笑)」

さつきは吉田にちよっとおどけた感じと言った。



吉田「そうだな…じゃあ平森、早速履いてくれ」

吉田はさつきにすぐ頼みこんだ。

下着は脱いで直穿きしてほしいとも指示していた。

「ええ〜(笑)？」と笑いを含ませた返しをしていたが特に抵抗することもなくサツと準備するさつき。



吉田「おじゃましまーす」
さつき「笑）いらっしやーい…なんちゃ
って」

吉田の言ったことに対してノったの
か照れ隠しなのか、恐らく半々でさつき
はそう返答した。

吉田はさつきの黒タイツの局部に頭
を侵入させる。

厚手の黒タイツを伸ばしてグリグリ
と頭を潜り込ませようとしていた。



恥ずかしさよりくすぐったさが勝ったのかさつきは少し笑っていた。

吉田「はあく…天国…一度やってみたかったんだ」

さつき「…これ、端から見たらそうとうヤバイ感じですよね」

仰向けに寝た女子生徒の黒タイツの局部がもっこりと盛り上がっている。

そこには中年の担任教師が頭をすっぽり突っ込んでいる。

吉田「恥ずかしいか平森」

さつき「それはまあ…というか先生の方が相当恥ずかしいんじゃないか」



さつき「あと、その…顔面に先生のりが張り付く…」

吉田「ぐ自由にお召し上がりください」

さつき「ええ〜(笑)!?」

吉田「先生も目の前の美味しそうなのが馳走になるからな…」

わしお「…んっ!!」

吉田「〜っっ!!」

わしお「〜っっ!!」



わざわざ下着を脱がせてから直穿きさせているため、黒タイツに侵入した吉田の目の前にはむき出しのさつきのソレがある。

吉田は遠慮なくむしゃぶりついているのだろう。

さつきのリアクションから伺えた。脚をもどかしそうにパタパタ動かしている。

対してさつきは顔に乗っかっている吉田のソレをどうにかする以前に、自分のモノを弄られていることに全意識を持っていかれていた。

秘部を口で弄られるという初めての体験。身体を伝うのは紛れもなく快楽の刺激だった。



さつき「ほっ……お……!!」

短い喘ぎ声を発するだけのさつき。

吉田と同じように目の前のソレを口で弄る余裕はなかった。

そこで吉田はさつきの顔に下半身を押し付けた。

そのままゆさゆさと腰を揺すり、さつきの顔面にソレを擦り付ける。

吉田「おお……」

吉田も満足そうに小さく呻き、しばらく続けていた。



吉田「気持ちいいか平森」

さつき「…き、気持ちいい…」

吉田の下半身に埋もれながらも、初めて与えられたその刺激が本当に気持ちよかったのだろうさつきは正直にそう返答していた。



さつき「んっんっ…ん」

体勢を変えて今度こそさつきにソレを
口で奉仕させていた吉田。

先ほど自分の秘部を散々弄ってもらっ
たお返しという認識なのか、さつきはほ
とんど躊躇することもなく吉田のモノ
を口に含み口内で刺激を与えていた。



吉田「もっと…口を窄めて吸いついてくれ…」

さつき「んん…！」

吉田はアレコレ指示を出しているが、さつきからすれば初めての行為なので、そうやってリードしてくれる形の方がやりやすいのだろう。

自身の口内に何度も出入りするソレをしっかりと迎え入れていた。

吉田「平森…」

さつき「んん?」

吉田「俺のちんぽ美味いか…?美味そう
な声出してくれ…」



ちしき「んっっ…」

ちしき「んっっ♪んっっん…♪んん

っっっ!!♪」

吉田「ハアハア…」

ちしき「んっんっん…んうっっっ♪」

吉田「そうか…平森…可愛いぞ…!」

ちしきは啜えたままそれっぽイトーン
で声を発する。

吉田は満足そうだった。



そのままさつきの口内で果てた。

少し腰の動きが激しくなったと思った
ら短く呻いた。

吉田も無理やり喉奥まで突っ込んでい
る訳でもないのだろうが、中年男性が華
奢な女子の頭にのしかかっているという
視覚的なインパクトがあった。

口内に排出された白濁の粘液はそのま
まさつきの喉を通り胃袋に納まったよう
だった。

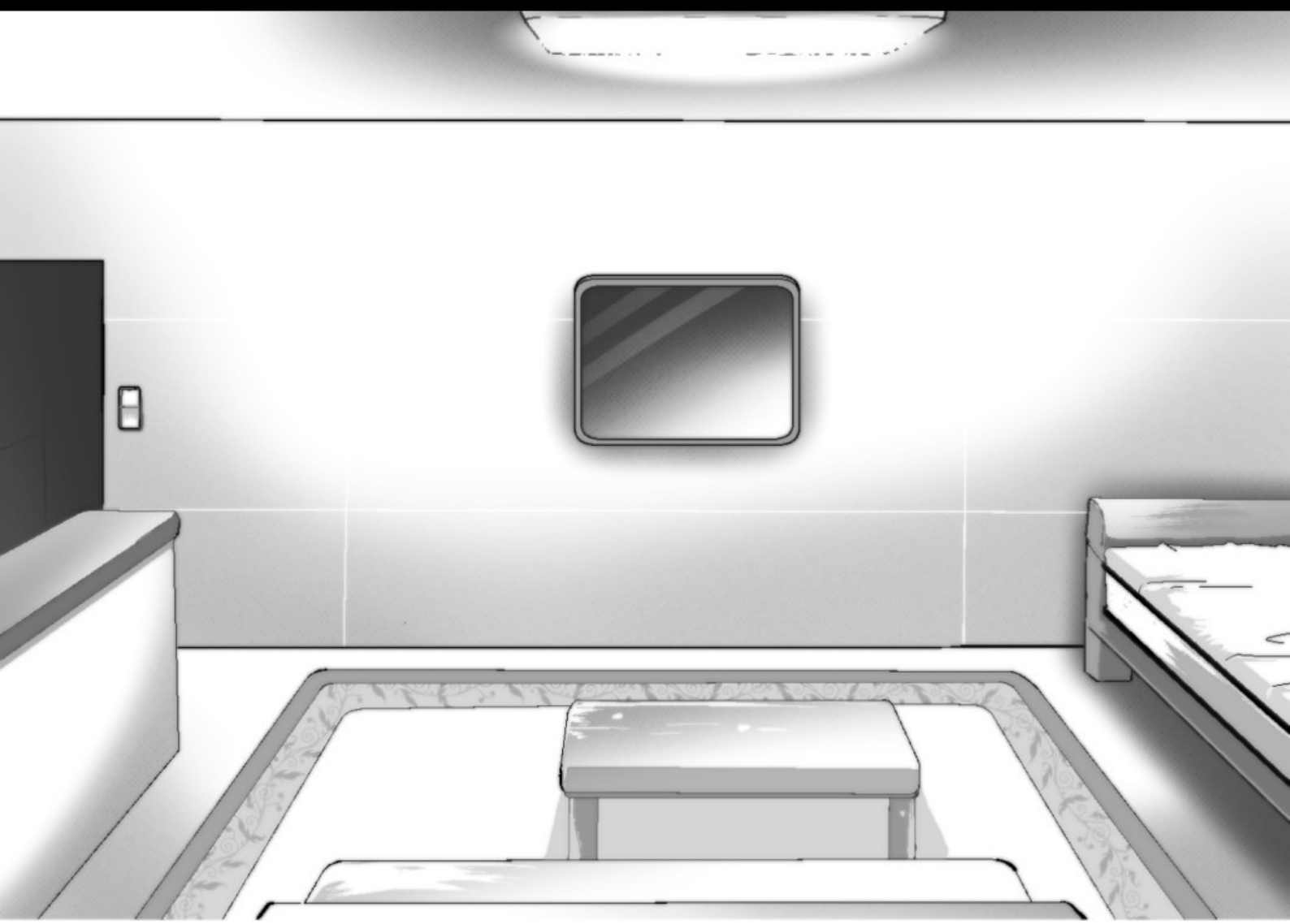


吉田「ハアハア…」

ちしち「ふう…ん…」

吉田「痛くないか？」

ちしち「はら…平気です…」



さつき「先生本当に黒タイツ好きなんですね…履いたままなんて…」

吉田「めっちゃくちやエロイぞ平森…」

吉田の性欲処理をさつきが手伝うようになって数日が経っていた。

あつという間に、当たり前のように、身体の関係までいった二人。

吉田の言った通りさつきの下半身には厚手の黒タイツが装着されている。

下ろしたてのモノだったが、局部が破けてさつきのソレが外気にさらされている。



対して吉田のソレには薄緑色の避妊具
…コンドームが装着されていた。

準備断端の二人のソレらはそのままじ
つくりと結合した。

コンドームなんてそんなものまであつ
たのかと友馬は思ったが、後に備蓄室を探
ったら見つけた。

…実質一人で過ごしている空間にそん
なものを置かれてもどうしようもないが。



吉田「気持ちいいか…平森？」

さつき「…っ、まだ…あんまり、分かん、
ない…です…っ」

口では分からないと言ったが、吐息混
じりに小さく喘ぐ様子を見ると、恐
らく自覚がないだけでしっかり感じて
はいる。



さつき「はぁ…あっ…あっ…あぁ…!!」

吉田が果てようとしていた終盤には、もうさつき自身でも完全に自認できるほどにしっかり愉悦に浸っていた。

吉田「これがセックスだぞ平森…! どうだ?」

さつき「あっあっ…セックス…気持ちいい、です…!!」

吉田「先生も気持ちいいぞ…! 平森とのセックス…! ハアハア…」

「平森とセックス…! 平森とセックス…!!」

さつき「はい…! 先生とセックス…! 先生とセックス…!!」



二人「~~~~っ!!」

二人は、セックスと何度も口にしては、
お互いが今行っていることを確かめ合い
ながら行為を続けた。

そのまま当然のように三回戦やり抜い
た。



二人の生活の中に体を重ねる「スキンシップ」の時間が加わった。

他にすることもないからと、当たり前のように。

吉田が何の前振りもなく「セックスするぞ」と言いつつおしきは「いきなりです…」と笑い交じりに返すが、そのままどちらともなくベッドに近づいていき服を脱ぎ、行為に及ぶ。



さつき「はいっ黒タイツは履いたまま…
ですよね(笑)」

吉田「そうだが…用意がよすぎるといっ
か…そこを指示するやり取りが欲しっか
たというか…」

さつき「ええっ?どうせこの状態にさせ
るじゃないですか」

教師と生徒という関係性の男女が、あ
りえない会話をしながら妙に緩い空気
で体を重ねている。

優しく真面目なさつきが、担任の教師
相手に少し砕けた態度でおふざけ混じり
のやり取りをしている。



さつき「それにしても…吉田先生とこんなことしてるなんて未だに信じられませんがね」

吉田「こんなことって?」

さつき「…(笑)…こほん」

「セツクスです♪」

吉田「何か問題あるか?教師と生徒間の「コミュニケーション」の範囲内だろ?」

そんなこと」

さつき「パンパンに膨らませたおちんちんで何度も腰を打ち付けてくることですか?」

吉田「そういう青春のスキンシップだ…」

♪」



さつき「三つ編みおさげに厚手の黒タイツ
なんてダサ田舎っばい女子相手に?」

吉田「俺の好物だが?」

さつき「…じゃあ何も問題ないですね(笑)
すみません変なこと言ってるW」

吉田「全くだ…(笑)セックスに集中しろ平
森♪」

さつき「はい(笑)」



精神的にも窮屈だった閉鎖空間での暮らしの中で、行われる男女の営みは肉体的にも意識的にも味わったことのない刺激だった。

さつきは明らかに愉悦に浸りきっていた。



さつき「〜〜それで夏休みにはお祭りとか
花火大会とか…催し物には大体一緒に行
つてて…」

「冬休みの年明けには二人で一緒に初詣
行くのがお決まりになってますね」

吉田「そんな当たり前みたいにも二人
でいたらやっぱり周りからかわれたり

するんじゃないのか？」

さつき「そうですね〜…でもずっと一緒だ
つたんで私も友馬も別に…何がおかしいん
だろうなくみたいな？」



聞いている分には何てことない会話。

しかし二人の下半身は秘部同士を結合させて、何度も激しく体を打ち付け合っている。

吉田「じゃあ山野とは〜」

さつき「あもう、先生?」

吉田「なんだ?」

さつき「ごうごうとしてる時…何でやらと友馬との思い出とか喋らせようとするんですか?」



吉田「ん？そうだったかあ？」

さつき「そうですね？友馬との昔の思い出とか、私が楽しそうに話していると…先生の腰の動きが妙に激しくなるんですよね…」

「おちんちんも気のせいかもしれないもよりパンパンになってる感じがしますし(笑)」

吉田「気のせいじゃないか(笑)？」

さつき「ふーん…じゃあ気のせいってことにしておきましょうか…???(笑)」





さつき「はあ…友馬、どうしてるかなあ…

会いたいなー…(笑)」

吉田「…」

さつき「~~~~っ!!♪あ、やっぱり激しく

なったような…w」

吉田「気のせい気のせい」

さつき「先生ったら…w正直に言ってくれ

てもいいんですよ?」

「セックスしてる時に他の男の話をするな

~~~~♪」

吉田「いやいやそんなことないぞ♪幼馴染同

士の微笑ましい思い出話をそんな風に聞い

てるわけないじゃないか」

さつき「へえ~~~~…(笑)」

さつき「私はてっきり友馬に焼きもちでも妬いてるのかと  
思ってた…すみませんそんな訳ないですよねー♪」

吉田「そんな訳ないぞ(笑)ほら、セックスに集中しろ♪」

さつき「はーっ…♪」



吉田の意図を分かった上での言動だった。

そういったやり取りを「フリ」として二人は行為に及んでいた。

友馬を引き合いにして二人は盛り上がっていた。

壁越しに本人がいることも知らずに。



さつき「はあ……あ……！せんせい……ひ  
どろどろすよお……♪」

「女の子の髪の毛引っ張るなんて……  
こんなの……♪」

吉田「平森が変わった体位をしてみた  
いっていったんじゃないか」

「どうだ？先生が平森のためだけに  
考えた体位」



さつき「…よくわかりませんが…相当  
マニアックな感じだと思います」

「よくこんなの思いつきますね…(笑)」

吉田「平森のチャームポイントのおさげ  
を見ていて思いついたんだ…」

「正直、付き合ってくれる平森も平森だ  
ぞ(笑)」

さつき「もう…せっかく協力してあげて  
るのに(笑)」



吉田「平森、はつきりと言ってくれ…どうだ？このプレイ？髪引っ張られながらするの…気持ちいいか？」

さつき「…はい」

「髪の毛…引っ張られるの、なんかゾクゾク、します…」

吉田「好きか？これ」

さつき「好きです…気持ちいい…です…♪」



吉田「よかった…変態平森のお気に  
召したようで(笑)」

さつき「もう…！へ、変態なのは先生  
の方ですよ…！」

吉田「ん？そうだが？？俺は変態だ  
ぞ、どうした今さら…♪」

さつき「…ずるこ」

吉田「平森も変態になれ…！」

さつき「へ、へっへーん…変態になん  
かなりませんよーだ(笑)」



吉田「変態になれ…！変態になれ…！

変態になれ、平森い！！」

さつき「なりません…よくだ

…♪」

吉田「私は変態ですと言うまでやめな

いぞ…♪」

さつき「~~~~っ♪！！」

もう、普通の体位では物足りなくな  
った二人の男女が、独自に考案したプ  
レイをただひたすらに楽しんでいた。



吉田「いいか…合体！っていいながら  
被るんだぞ…」

さつき「もう…なんですかソレ…(笑)」

吉田「さくね…」

さつき「…(笑)」

モ  
ゾ  
ゾ  
ゾ  
...

二人「…合体…！」

笑いを含めた返しをしながらもさつきはちゃんと合体と口にする。

そうして二人は一緒に黒のタイツを頭に被った。



二人の頭部の形が浮き上がる様に伸びるタイツ。

その中では吉田とさつきが窮屈そうに顔を寄せ合っている。

端から見れば全く理解できないプレイ。

その頭に被ったタイツの中からは二人のくぐもった声や息遣いが漏れている。

吉田「どんな感じだ…平森」

さつき「…なんか、すごい変態チツクな感じですよ…(笑)」



さつき「こんなの誰かに見られでもしたらって思ひと…」

吉田「興奮するか…？流石変態さつき」

さつき「もう…って、先生…今名前で…」

吉田「ん？どうした？まだ変態って認めないのか」

さつき「そっちじゃなくて…いいですよ、

もう…(笑)」

吉田「よしよし、やっと変態と認めたか…

先生は嬉しうぞさつき」

さつき「はいはい…私は変態女の平森さ

つきでーす」



吉田「これを山野が見たらどう思うんだ  
ろうなあ」

さつき「…逆に私だってバレないと思っ  
ます…見た目がヤバすぎて(笑)」

吉田「その時は目一杯ごまかさないと  
…さつきが絶対に言わないようなこと  
山野でも聞いたことのないような喘ぎ  
声をあげて…」

さつき「どんなふうですか…?」

吉田「それはフリか…?変態さつき」

さつき「まあ…どうでしょう…?変態先  
生?(笑)」



吉田「~~~~ひゅ!!」  
さつき「~~~~っゅ!!」

急に動きが激しくなった。

二人は身体を絡ませてお互いを貪り  
あうようにがつつきだした。

じゅうう〜…と唇を吸いあう品のな  
い音が聞こえる。

『ん…んっ…お…おお……!』

どちらが発しているのかも分からな  
い低く呻くような吐息混じりの声。



二人は今、黒タイツの中でどんな表情  
をしているのだろうかと友馬は思った。

誰の邪魔も入らない二人だけの空間  
だからと、思うがままに、求め合う。

もう完全に二人きりの世界に入り込  
んでいた。

黒タイツをかぶり、一心同体となった  
合体生物はベッドの上で幸せそうに  
うごめいていた。



さつき「…はあ…！はあはあ…！！♪」

吉田「ハアハア…楽しかったなさつき…

(笑)」

さつき「はあはあ…はい(笑)こんな変態

ごっこ…絶対見られちゃいけません

よね…♪」

吉田「人間性を疑われるな…幼馴染の山

野でも受け入れてくれるかな？」

さつき「もう…先生そうやってすぐ友馬

を引き合いにして…」

吉田「もし山野がさつきまでの変態ごっ

こをすべて見ていたらなんて言い訳す

るんだ…(笑)？」



さつき「…違うの友馬！これは…先生との  
コミュニケーションなの！私と吉田先生  
だけが分かり合える絆のスキンシップ！」  
「生徒と教師の熱い青春を体で語り合っ  
てただけなの〜!!」

「…っていいますよ。」

吉田「ただのセックスだろ…♪」

さつき「もう…まあそうですけど…w」

二人「(笑)」



散々好き放題に変態プレイを満喫した二人は、ピロートークというには軽快過ぎるやり取りをする。

さつきは黒タイツだけ履いた半裸の姿で、全裸の担任教師とおふざけトークをしている。

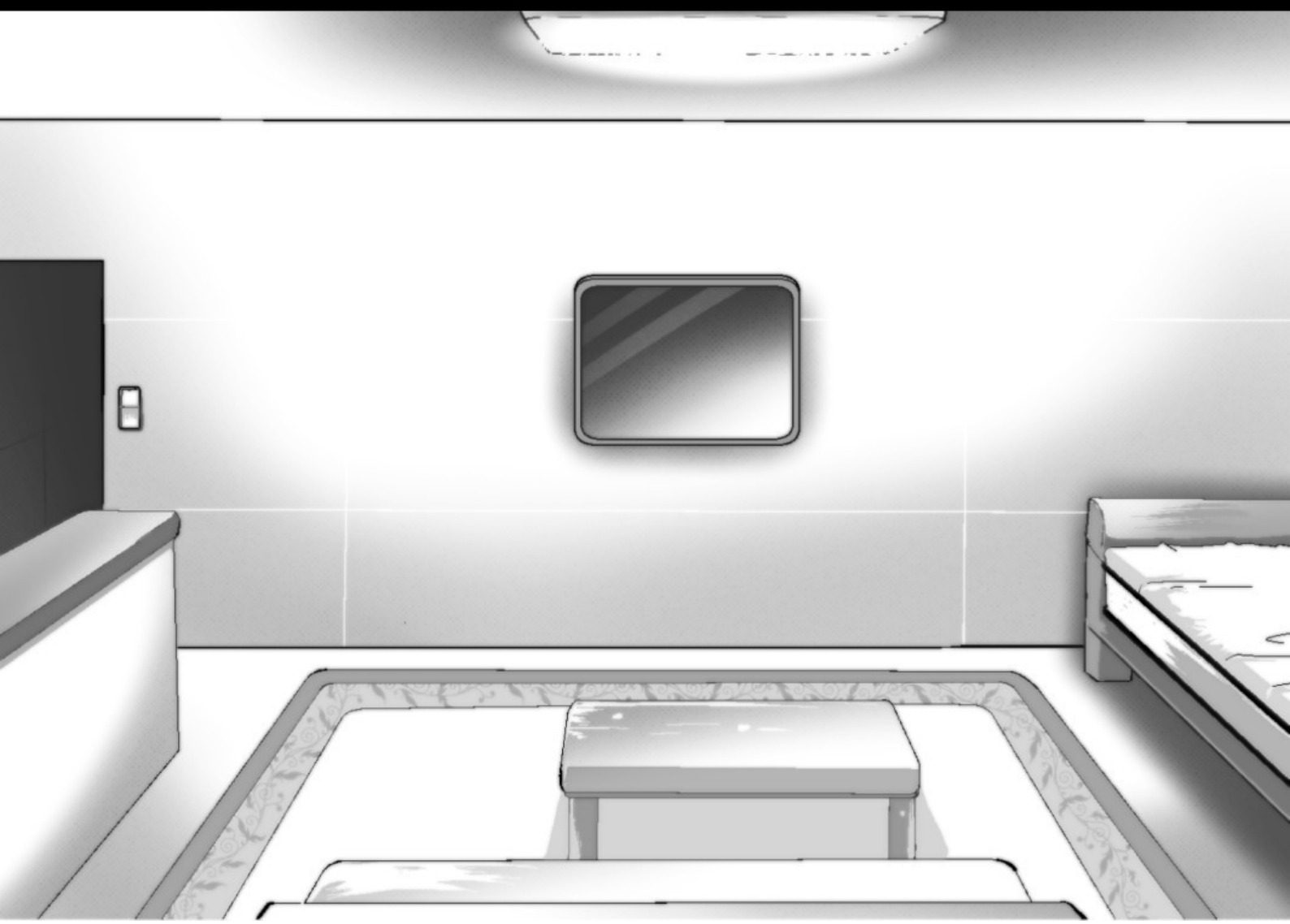
あの、幼馴染のさつきが。



[……]

[「R……」]

友馬「……ん？」



さつきがフツと顔を上げたと思ったらそのままピタッと固まった。

比喻ではなく魔法で固められたかのようになんか止まっている。

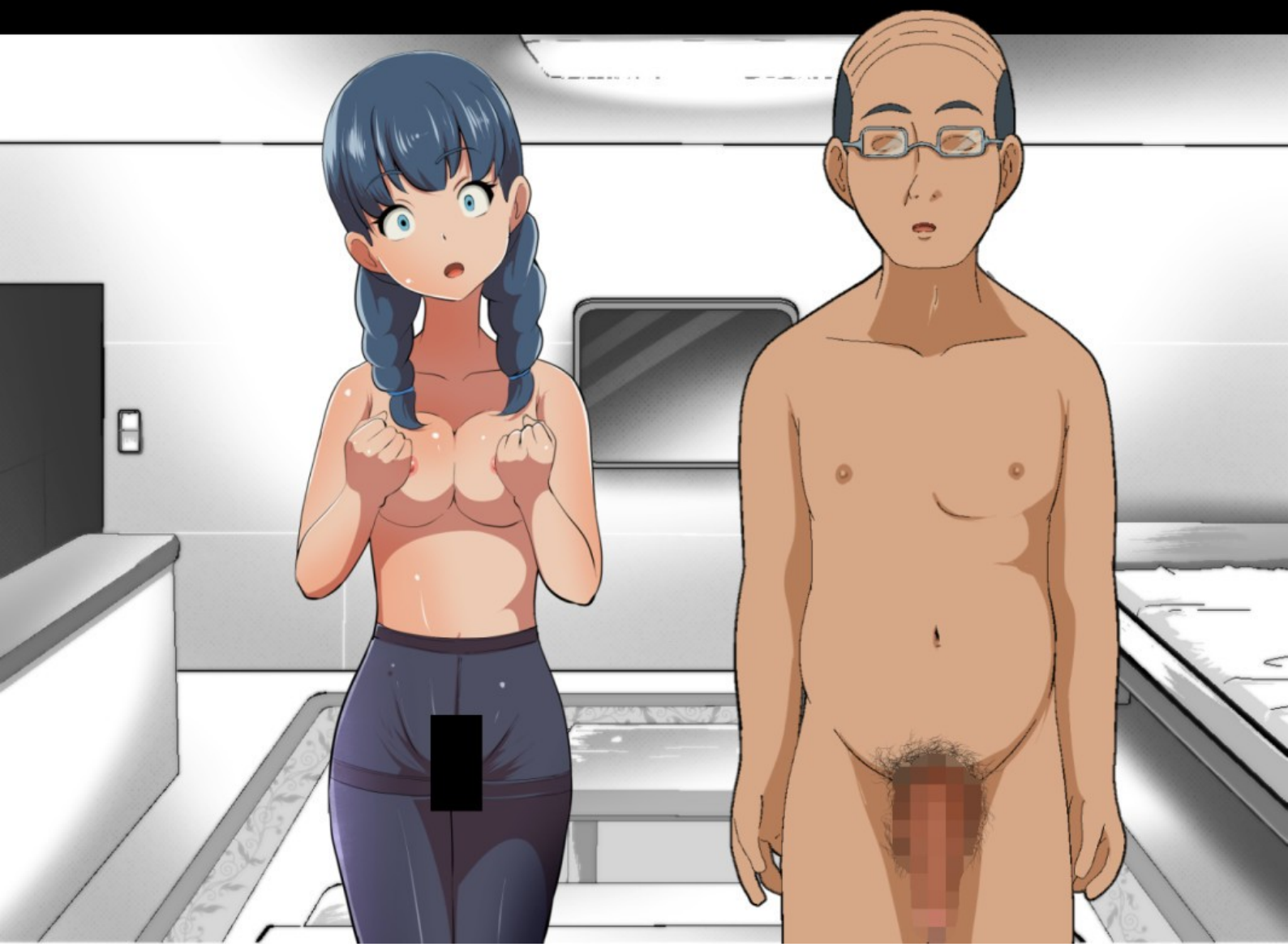
遅れて吉田もさつきの視線の方へ顔を向けた。

そして、同じようにガチッと固まった。

友馬のいる方向だった。

と、いつもより見えないはずの壁越しにいる友馬を見ているようだった。

しっかりと壁越しの友馬と目が合っていた。



友馬「…あ」

さつき「え…あ…え？」

吉田「お…」

もう完全に認識できているのが分かった。

目を合わせたまま、口だけパクパクと動かすさつき。

何故このタイミングで急に見えるようになったのか、この状況をどう処理すればいいのか。



友馬からしてもやっと二人とコンタクトをとれるようになってたが、今、何をすべきなのか全く判断できない。

ゆっくり手を前に伸ばす。ピタッと分厚いガラス面の感触があった。

向こうからも確認できるようにはなっ

たが、壁がなくなっただけでは  
ないようだった。

友馬は少しだけホッと安心してしまった。

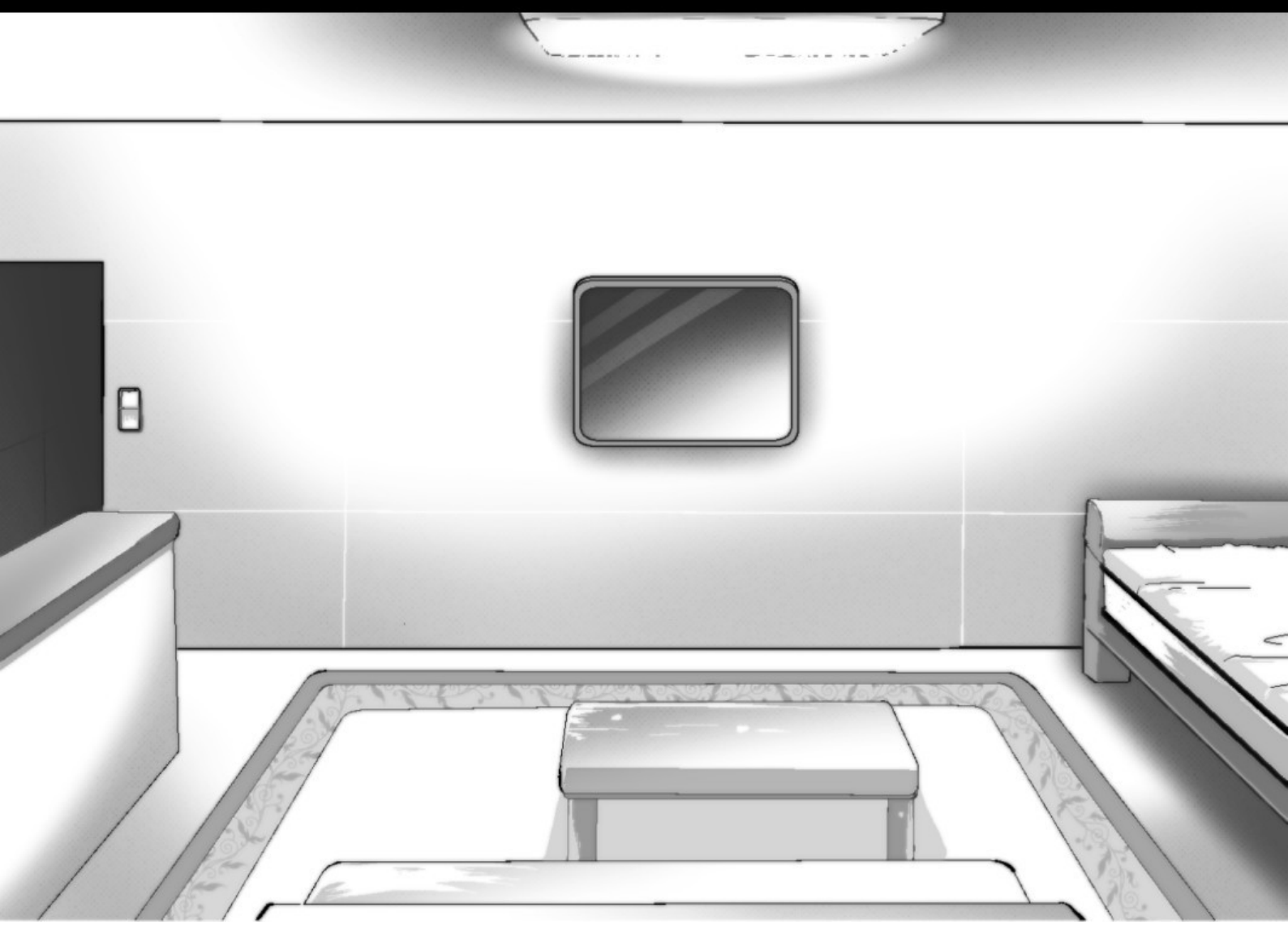
三人が全く動けなくなった状態が続く、かと思った。



吉田「…ひー…」

ちじき「んっ!!」

友馬「!!」



吉田がさつきを抱き寄せて唇を重ねた。

吉田「っし………」

さつき「…」

友馬「あ……」



さつきは目を丸くしていたが、数秒その状態が続くとゆっくりと落ち着いた表情になり、静かに吉田を受け入れる。

友馬はその二人を黙って見ている。

吉田「…さつき、好きだ！」

さつき「え……えええ!？」



とろんとした顔つきだったさつきは、再び驚きの表情をみせる。

吉田「山野に焼きもち妬いてるのかって言  
ってたが…その通りだ」

「さつきと山野が仲良くしていることに  
嫉妬していた…!」

さつき「…」

吉田「俺だって…さつきのことが好きだっ  
たんだ…!!」



吉田「こんな意味の分からない空間に閉じ込められたのも…初めは動揺してたが、さつきと二人きりで過ごせると思ったら嬉しさで…邪な気持ちが出てきて…」

「優しいさつきなら、こんな状況にかこつけてエロい事頼んでも、受け入れてくれるなんて勝手に思い込んで…」

さつき「…私だって」

友馬「…」

さつき「信用していた担任の先生にそんなこと言われて…ショックだったけど、男の人だからそういうのも仕方ないと思って受け入れてた…」



さしき「…でも」

「段々、なんか…普通に先生とそういう事するのが楽しくなってきた…」

「私のすることに全力で喜んでくれたり、いろんな反応してくれて…身体のコミュニケーションがこんなに濃厚で熱いものなんだって先生に教えてもらっただよ…」

二人はお互いの想いを打ち明け合う。



吉田「山野のいないこの状況でこんなこと言うのは卑怯だと思ってる…」

さつき「…今は友馬のことは関係ないですよ…幼馴染だからって付き合ってたわけでもないんですから…」

「先生の…想いを、しっかり聞かせてください」

二人はまるで友馬など見ていなかったような言い方で話を進めている。

その本人は目の前にいるはずなのに。

…ような、ではない。

友馬は感じとった。



二人は見えないふりをしている

突然目の前に現れた友馬を  
見なかつたことにしている



吉田「さつき……！本当に好きだ……愛してる……！」

さつき「……本当に？」

吉田「……ああ、嘘じゃない……キモい中年オヤジの本当の気持ちだ……」

さつき「キモくなんかないですよ……まっすぐ想いを伝えてくれる先生……素敵です」

その様子は段々と二人だけの世界にじわじわ沈み込んでいくようだった。

お互いを見つめ合い……もう、壁の方など一切見ていない。



吉田「…好きだ、さつき」

さつき「…はい」

「私も…先生のこと、好きです…」

吉田「愛してる」

さつき「私も、愛しています…」

吉田「さつき…」

さつき「はーん…」

吉田「…この瞬間を、セックスしよう」

さつき「…」



さつき「おーい!!」

吉田「俺の、正直な気持ちだ」

さつき「…ぷっ」

急な素直過ぎる要求に、思わず「ミカル」に返すさつき。

その後、吹き出した。

さつき「全く…困ったすけべ先生♡セック

スのことしか考えてないんですか?♡」

吉田「さつきは今何がしたい?」

さつき「え?セックスですけど?」



吉田「…ちひまろ♡」

ちひま「かかってっす♡」

二人「♡♡♡♡♡」

真正面から伝え合ったお互いの胸の内。

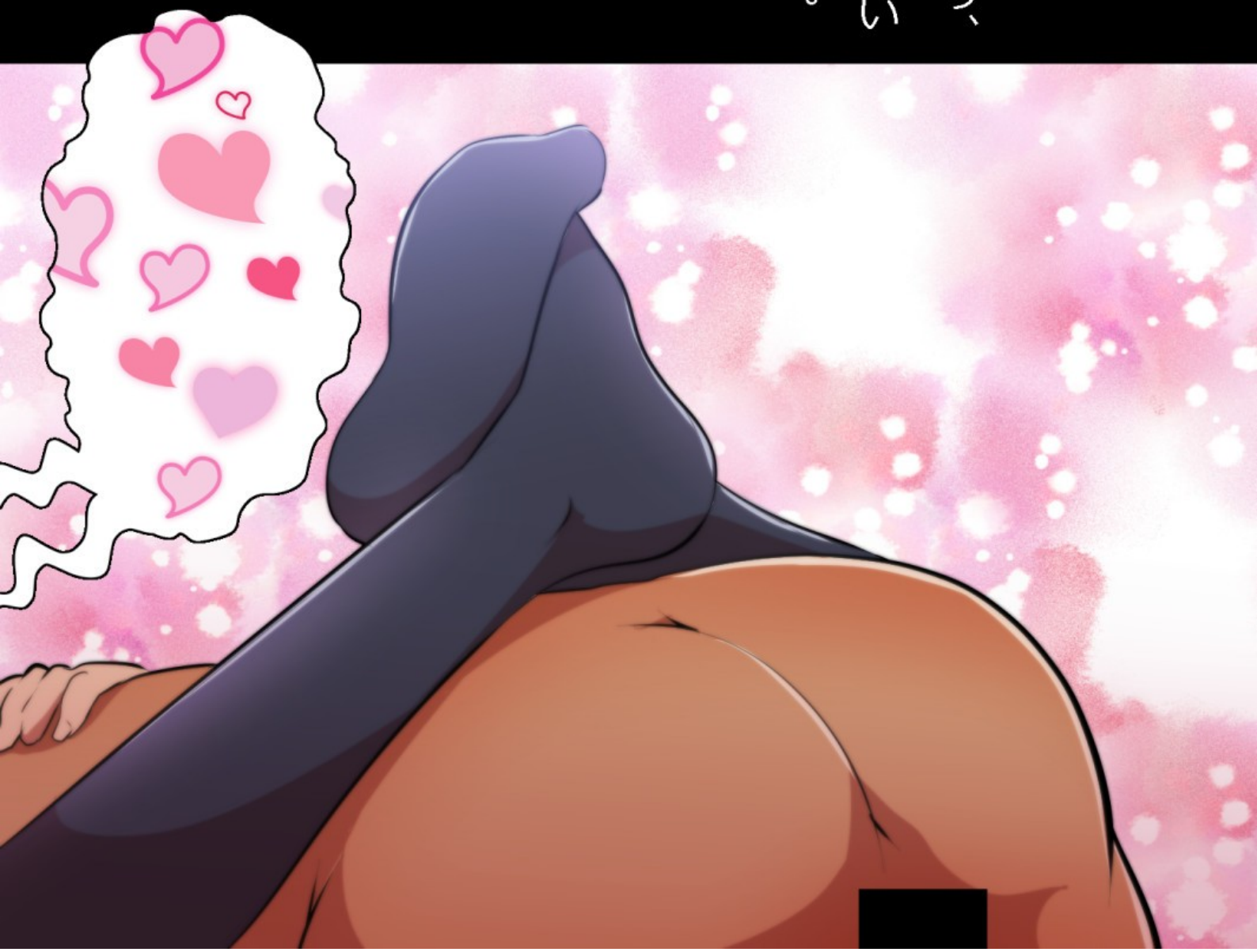
二人の愛は繋ぎ合わされた。

そしてちよつとごづき合いをしてから、  
思いつきり体でその愛を確かめ合いだ  
した。



幼馴染が目の前で担任と数日にわたり、  
散々セックスをしたあげく、自分を見ない  
ことにして、そのまま恋人関係になった。

そしてまたセックスしだした。



ちつき「~~~~っ!!」

吉田「ちつき、顔見てもいいか？」

さつき「絶対ダメです…♪ヤバい

くらいすごい顔になってると思

いますよw」

吉田「くっ…見たいい…さつきの

タイツ引っ張り顔…♡」

「どんなさつきだって俺は丸ご

と愛してるぞ…♡」

さつき「先生…♡」



吉田「こんな変態づっこ、もし…もしも山野に見られてたらなんて言い訳するんだ…？」

さつき「…いえーい！友馬♪私は担任の吉田先生と色々あった末、無事に両想いの恋人関係になりました〜(笑)」

「幼馴染の友馬でもこんな変態づっこ理解できないかもしれないけど…これが私たちの究極の愛情表現なんだ〜ww」

さつき「友馬ならきつと私たちの愛を分かってくれるよね？私たち変態ラブラブバカップルを応援してくれるよねw？」



吉田「ハアハア…さつきい…幼馴染の山野  
より俺を優先してまで…どうしてこんな  
変態ごっこに付き合ってくれるんだ」  
さつき「…先生のバカ!!…そんなの…」  
「先生を愛してるからに決まってるから  
でしょ♡」

吉田「…ちしき♡」  
さつき「ほらっもっと力いっぱい引っ張っ  
て♡変態同士、変態ごっこでたっくさん愛  
を確かめ合いましょっうね先生♡」

吉田「ああ…ちしき♡」



さつき「先生、何でも言ってくださいね♡愛  
する先生のためなら私…何でもできちゃう  
かも…♡」

「先生好みの変態女にしてくださいね♡」

吉田「やめてくれ…さつき…そんないい方

されたら…本当に変態過ぎる事やらせてし

まう…♡歯止めが利かなくなっつしまじ…

♡」

さつき「なっっちゃえなっっちゃえ♡」

「究極の変態女育てちゃえ♡♡♡」



吉田「俺は…さつきと永遠に愛しあう関係になるんだ♡」

「たださつきとラブラブでいたいだけなんだ♡!!」

さつき「先生…素敵です…♡素敵…♡愛してる…♡」

吉田「愛してるわさつき♡愛してるわさつき♡愛してるわさつき♡」

さつき「先生愛してる♡先生愛してる♡先生愛してる♡」

「♡♡♡♡♡」

二人「~~~~♡♡♡♡!!」



友馬「…」

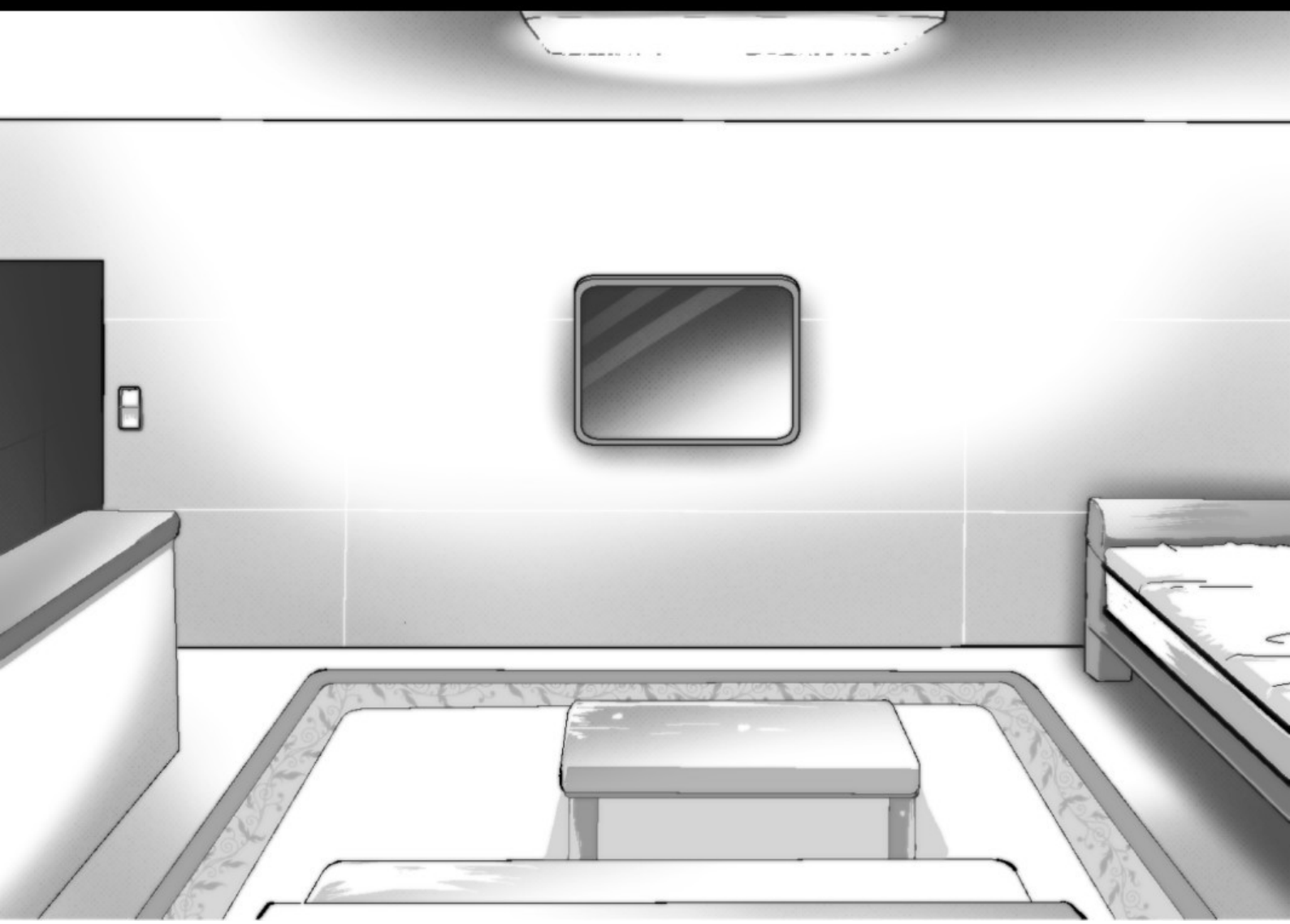
二人はやるだけやった。

思う存分、頭のとっぺんから足の先までしっかり身体が満たされるまで。

そしていそいそと風呂場に向かった。

多分一緒に入浴している。

途中からはもう友馬のことなど目もくれず、ひたすらがつつく様にお互いを求めあっていた。



友馬「…」

傍観していた友馬。

一人残された者。

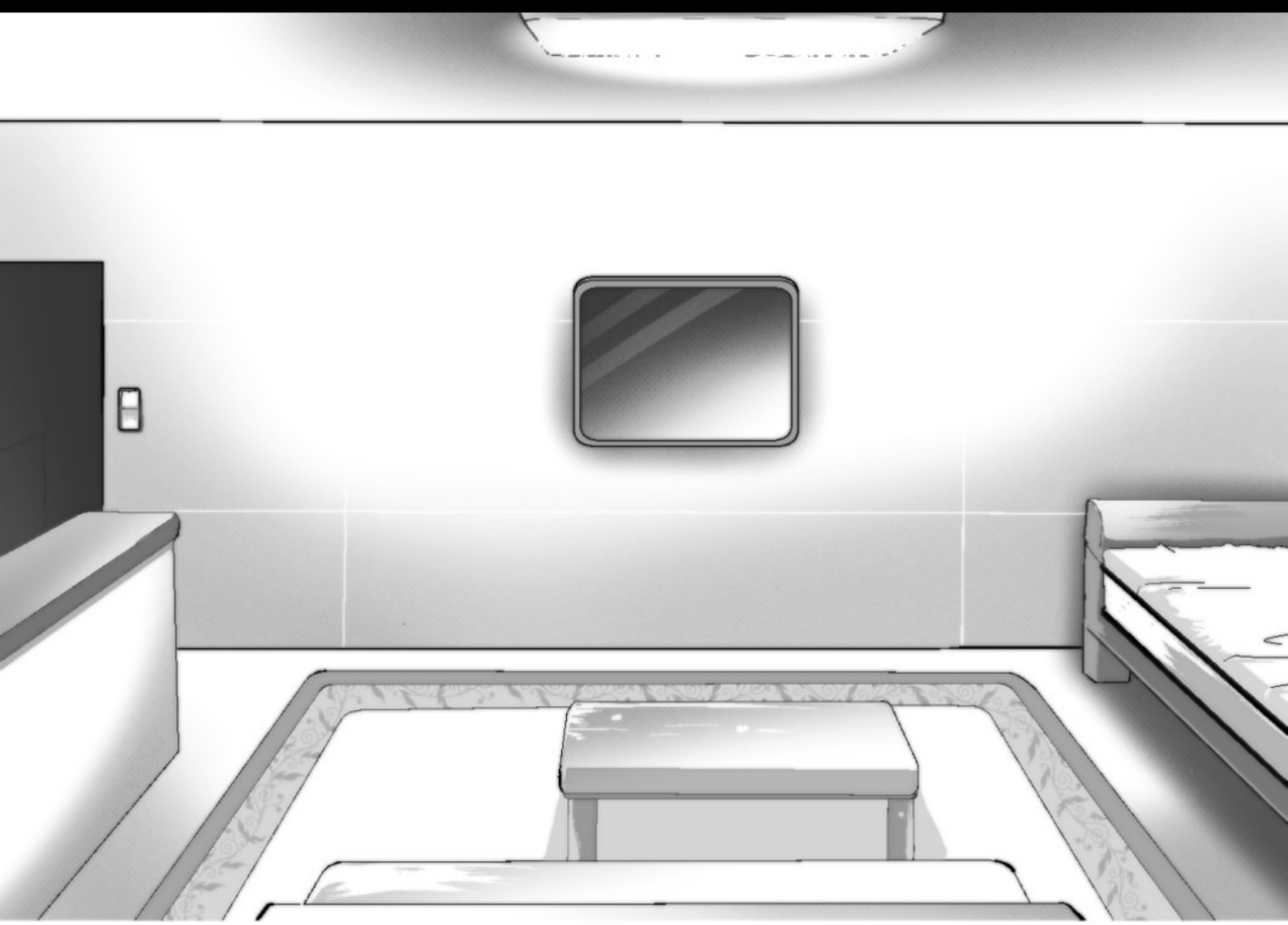
ピーっつと電子音が鳴った。

何事かと自分の空間に視線を移すと、  
久しぶりにテレビモニターがついてい  
るようだった。

正面に立つ。

『おめでとうございませす。二人は完璧  
なイチャラブバカップル関係になりま  
した』

モニターに映し出されるメッセージ。



…そういえばそんな条件だったな、友馬はボウツとしている頭の片隅の記憶を探る。

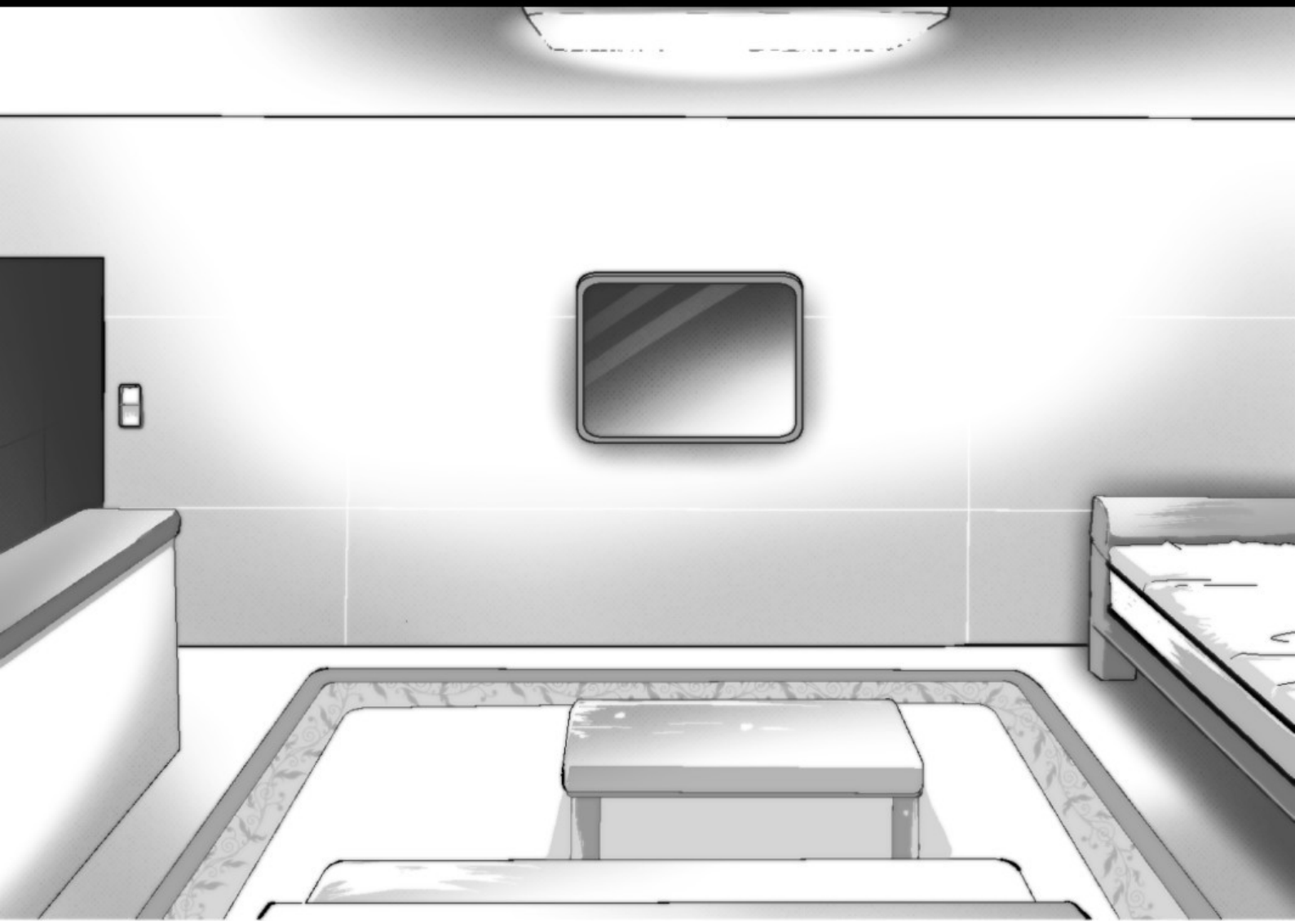
…達成された、らしい。

いや、目の前で見ていた自分が誰よりも分かっていた。

友馬「…っ」

視界がぼやけてきた。瞼が重い。

体に力が入らずその場でペタンと座り込む。



—

o

—

—

「友馬〜っ!」

地元の学校に通うごく普通の男子生徒、山野友馬(やまのゆうま)。  
幼馴染である平森さつきが声をかける。

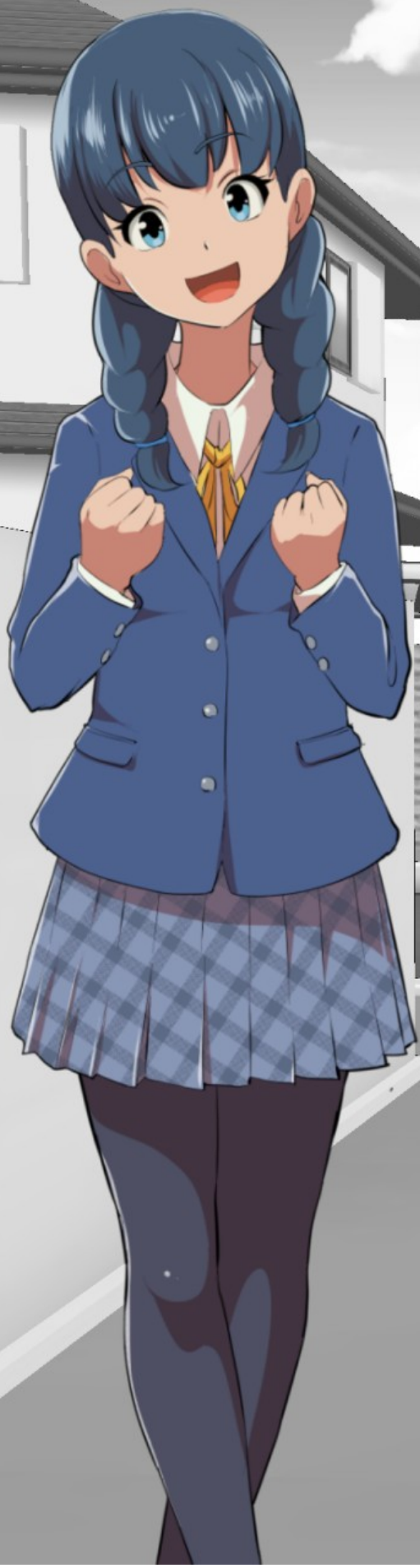


さつき「おはようー!」

友馬「ああ」

いつも通りの朝。

いつも通りの通学路を二人で当たり前前のように歩く。



□放課後

クラス委員を務めるさつきは、たまに放課後に居残り作業をする。

とはいっても10分もあれば済ませられるような雑務だが。

担任の吉田文雄（よしだふみお）先生に授業で使った教材を旧校舎まで一緒に運んでほしいと頼まれていた。

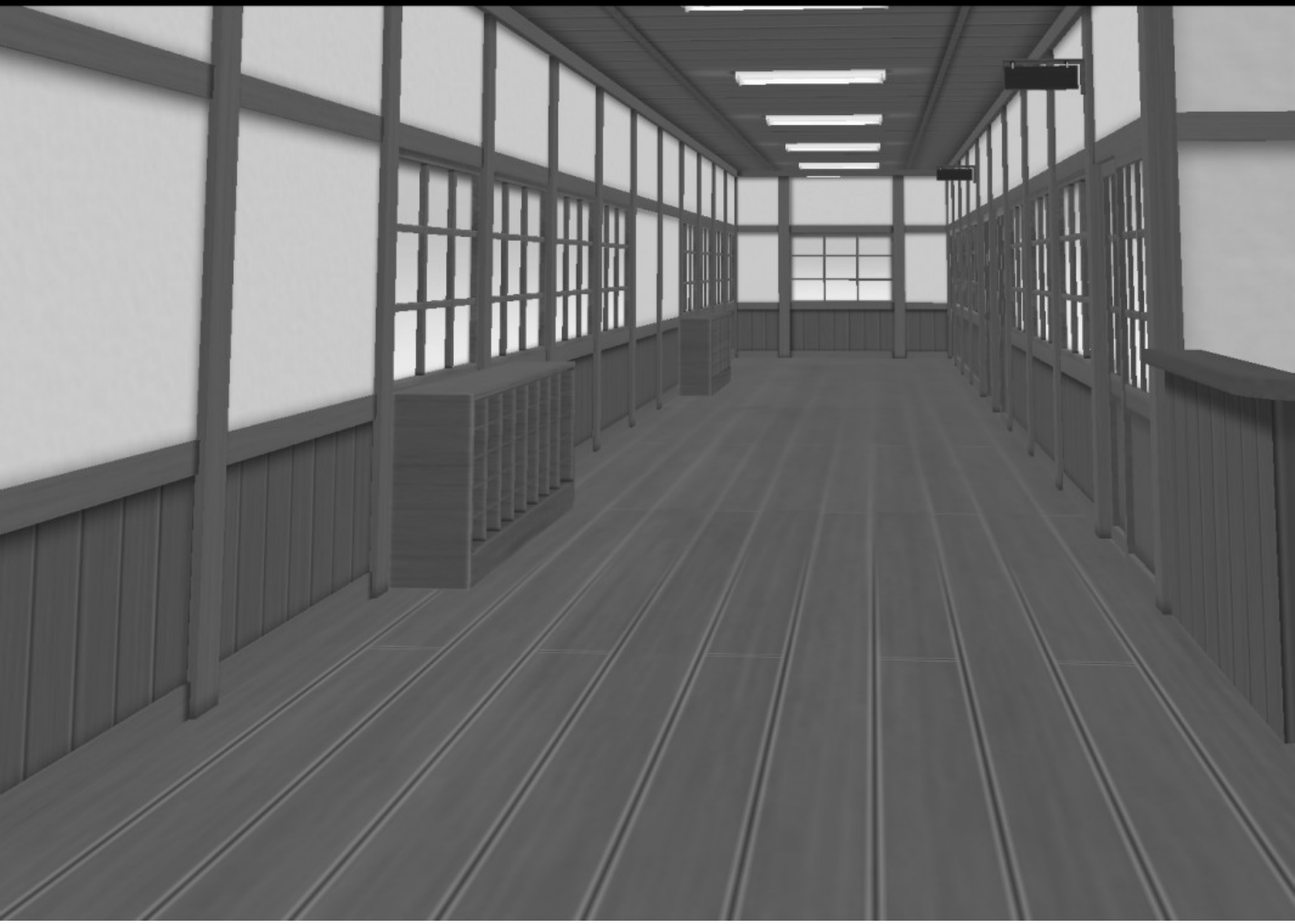


友馬は校内の自販機で買ったスポーツドリンクを二本持って旧校舎に向かう。

放課後にもなれば、生徒も教師もほとんど来ることはない空間。

ギツギツと歩くリズムに合わせて軌む木造の廊下。

そのまま奥の方にある宿直室に向かう。

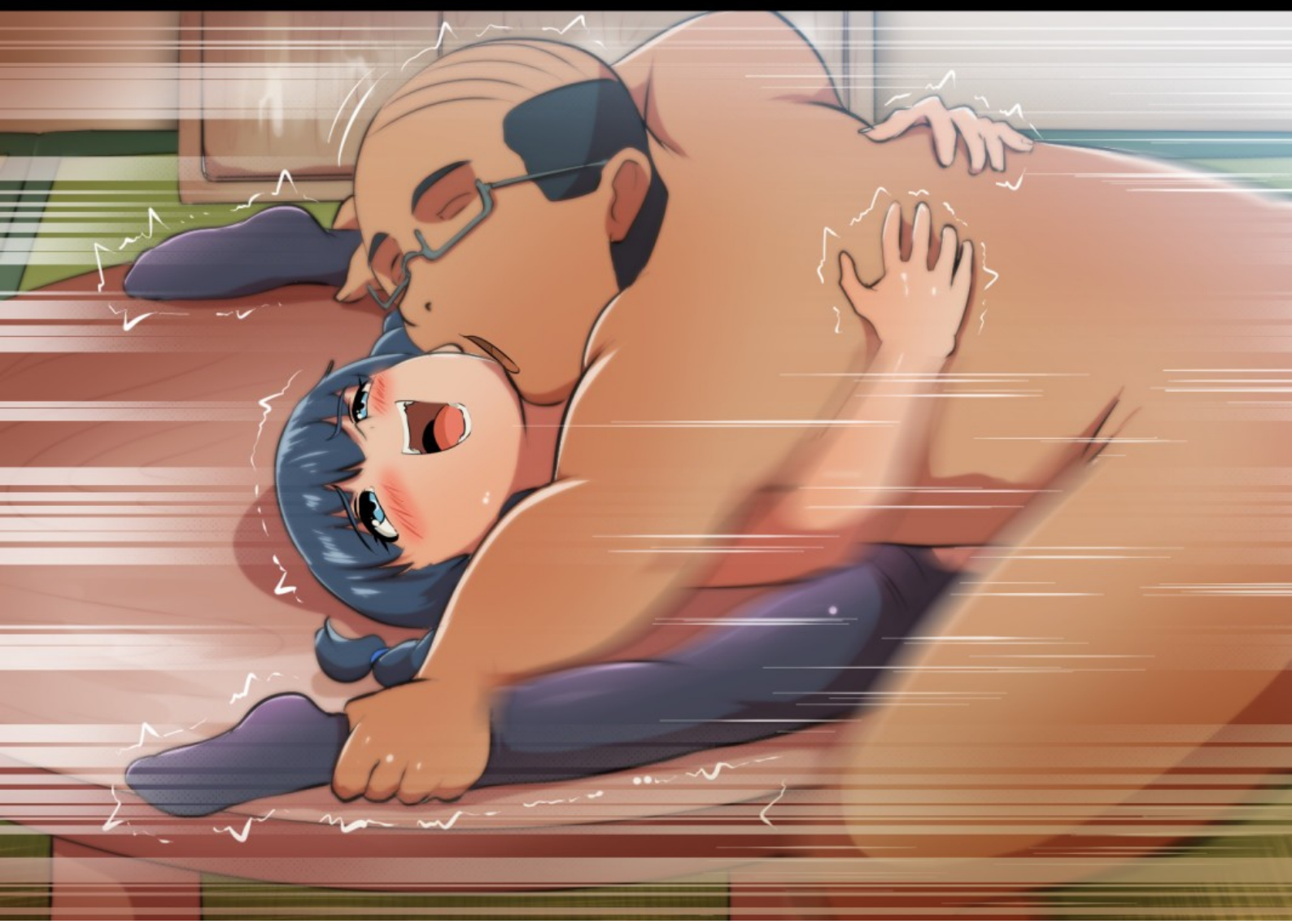


か  
千  
十

吉田「孕め！孕め！孕め！孕めえ！！さつき  
い！！」

さつき「あっあっああ…♡んっ…先生…友  
馬来たから…ちよっと休憩しよ…♡？」

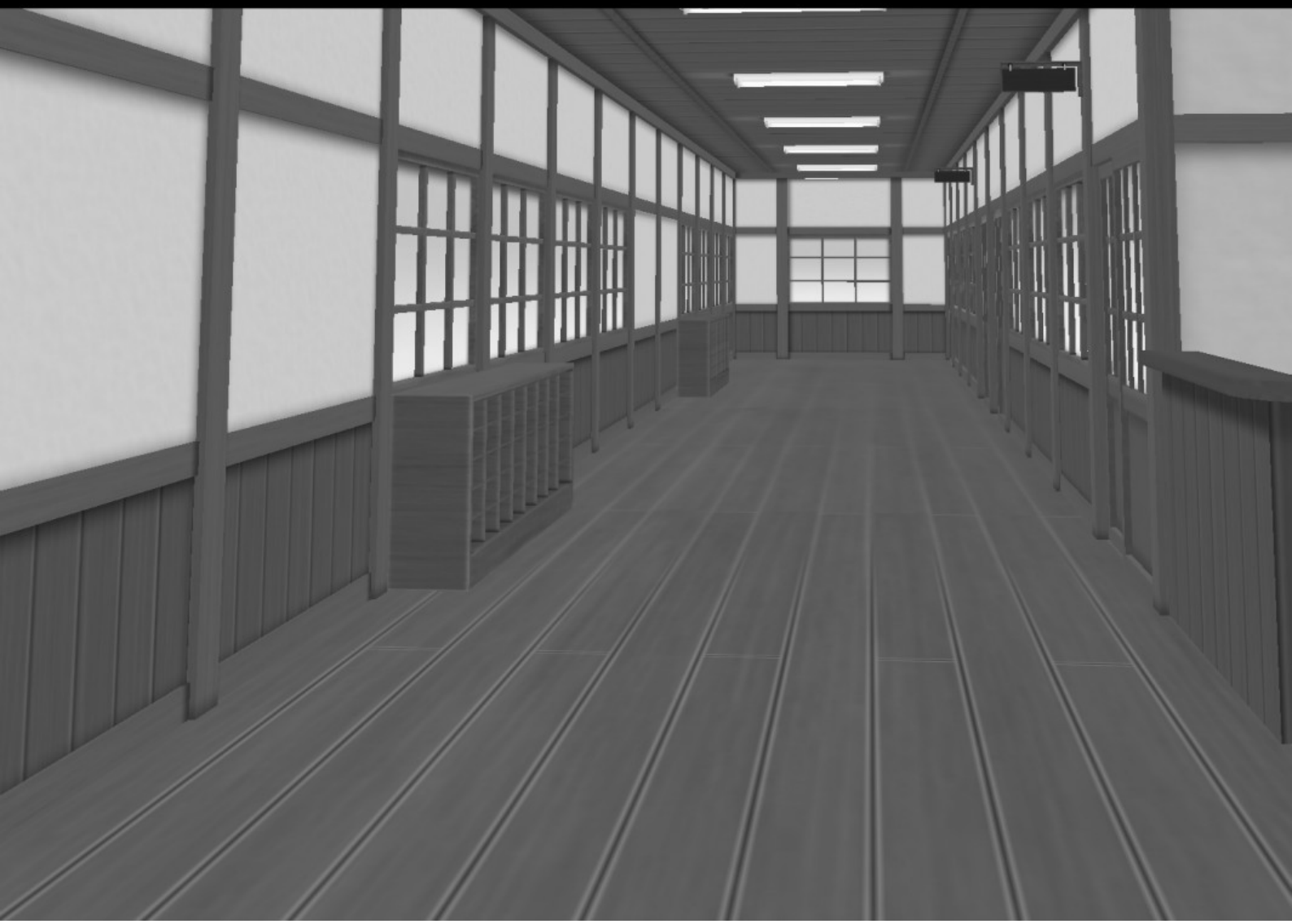
友馬「…差し入れっていうか…飲み物持っ  
てきただけだから…すぐ行くよ」



|| || ||

あれから友馬とさつき、吉田は何事もな  
かったかのように現実に戻ってきた。

旧校舎の空き教室にいた。放課後だった。



二人は、友馬に何かからどう話せばいいのかわからずにいる感じだった。

あの不思議な空間だったからこそ、あの意味想いをさらけ出すことが出来ていたが、現実に戻ってくるとしっかりと空気の変化を感じてしまう。

友馬「…」

二人はごく自然と近い距離にいた。



「まあ、好きになっただなら仕方ないんじゃないか」

と友馬は切り出した。

閉鎖空間に閉じ込められるという精神的に窮屈な環境下での魔が刺した行為が始まりではあったのかもしれない。

しかし、結果として2人が想い合ったのは事実。

「これから関係が続けていくかは二人次第だと思う。ただ俺は応援してやる」

それだけ言った。



「ありがとう…友馬が幼馴染でよかった」

さつきが震える声でそれだけ言った。

あと、いない者扱いされたのは普通に寂しかったと友馬は伝えた。(ごめんと普通に謝られた)



わしわ「あっ…孕めってさうのは…そっぴい  
うシチュエーションンってだけだからね！  
ちゃんとゴムしてるし…ホントに生でや  
ってるわけじゃないから!!」

「先生ったら孕めって言いながらだとす  
っごい激しくなるの…!」

吉田「さつきだって…興奮してアンアン言  
ってるだろ…!」

友馬「…構わず続き始めていいぞ…止めち  
やって悪いなバカップルコンビ」

わしわ「…」

吉田「…」



吉田「と、とりあえず飲み物ありがとうな

山野！」

友馬「はぐ…」

さつき・吉田「…」

友馬「…」

さつき「あの、友馬…?」

友馬「やっぱりちよっとだけ見学しよう

かなーって思ってた」

「イチヤラブバカップルのラブラブっ

ぷりを」

さつき「…」



吉田「よ、よーし…それじゃあ幼馴染の山野にしっかり見せてやろうか…！俺たちの変態ラブラブプレイを…!!」

さつき「…そ、そうだね…！しっかり見てなよ友馬く?? 私たちのイチヤラブ変態ごっこプレイ…！」

二人は友馬が来ると、少し照れが入るのが変におふざけごっこのような雰囲気であり取りをし出す。

それでも行為を続けているのが、二人だけで理解し合える関係なのかもしれないが。



吉田「孕め！孕め！孕め！孕め！孕め！孕め！孕めえ!!」

さつき「おっ……お……っ……お……っ……!!」

結局、なぜあんな空間で過ごすことを強要されたのかは分からない。

誰が、どんな目的で及んだ行為だったのか。

ただ、二人がその過程で愛し合う関係になったのは事実。

だとしたら幼馴染であり親友の自分は二人を精一杯後押ししたいと考えた。



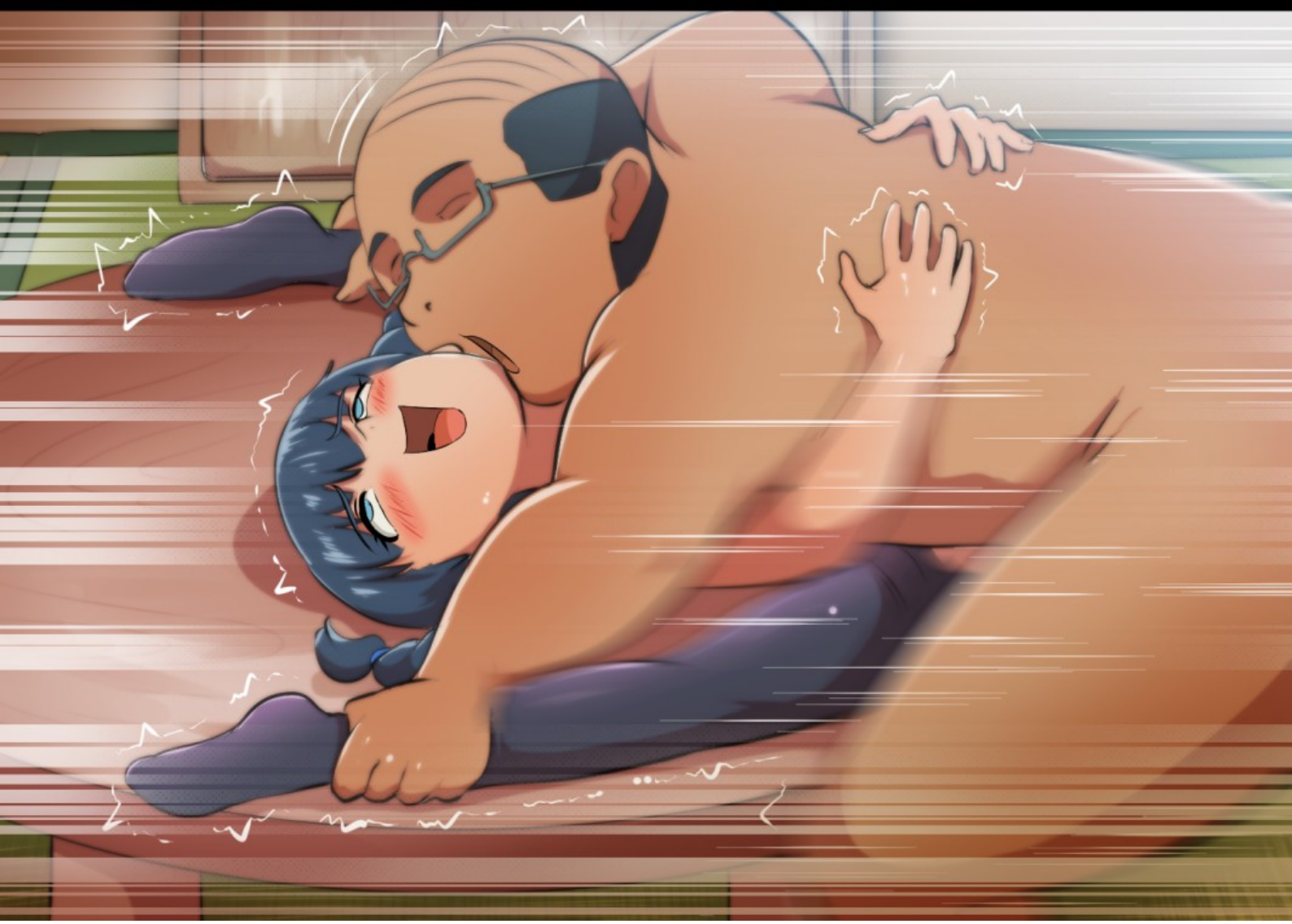
吉田「孕め孕め孕め孕め孕め孕めえ!!」  
さつき「~~~~っ……!せん、せ……え……♪」

夕夕三六畳の宿直室に吉田の孕めと  
いう声とさつきの吐息混じりの喘ぎ声  
が漂う。

教師と教え子という関係上、たとえ人  
の来ない旧校舎であつても、もつと考え  
て行為に及ぶべきではあるだろう。

…きつと二人でこつしたやり取りを  
しているのが楽しくてたまらない時期  
なのだろう。

羽目を外し過ぎないように幼馴染と  
して自分が見守らなくては…。



吉田「孕め♡孕め♡孕め♡孕め♡孕め♡孕め♡  
孕めさしゅら♡」

さつき「うん…♡孕む♡孕むう♡先生の赤  
ちゃん孕みたい♡卒業したら生中出し  
いっっぱいしてね♡絶対孕ませてね先生  
え♡」

二人『~~~~しあわせ…♡♡♡』



それから学校を卒業した後、二人はさっさと結婚した。

地元を離れたが、幸せに仲睦まじく暮らしているらしい。

幼馴染として二人に幸あれ。

一生ラブラブバカップルでいてくれ——。



—おしま—





◆使っていない

